論　説

（一九）三〇年代のフランスにおいて（二・完）

平　田　好　成

「民族問題の理解がそれである。この意味で確かにゴルバチョフはレーニンの後継者だ。レーニンにとっては、民族とは歴史から見放され、戦略的意味しか持たないのであった。……ゴルバチョフは自分の行動を脅かす民族の激動を傍観するばかりで、事件の流れを変えることが遂にできなかった。」

イレーヌ＝ダンコース『諸民族の栄光』九〇年の最終章で。

新しい道の調査　三〇年代のつなぎ目は、大きい知的沸騰の時期である。戦争から生じた社会に反対する反抗は、過去から着想を得られない、危機に対して独創的な解決法の調査を伴う。現代フランスの歴史の僅かの時期は、思想のかかる豊富の舞台活動であった。この発明の意思は、二六―二七年の周りに生まれる。発明の意思は、紛争によって産み出された変化の自覚の結果である。当時純粋に知的行使である、問題は、経済恐慌で新しい緊急を帯びる。この知的興奮は、これらの努力の中で、現実の一貫性を見付けることが困難であるようなものである。当時生まれる、続いて起こる年月の中

で、注目すべき発展をよく知っている、新方向の表を書くように試みよう。

計画経済論　経済恐慌は、市場経済に由来する、自然な均衡として確立された確信を着手した。激しい利害は、経済的流出を抑え付けるように、及び人々が、自由主義的無政府状態のために保持する、問題を逃げるように、意思を証明する、諸経験の方に向けられる。この領域の中で、人々は、ソヴィエトの場合に、特別の注意を提供する。人々は、モデルに対して、計画化を保持するようにではない。その理由は、計画経済論によって、利害関係のある界は、共産主義の崇拝者たちではない。人々は、国家に対して、経済の協議された発展を助成するように、計画経済論に手段を検討する。市場の起こり得る欠陥を修正する、調停。それは、アメリカ人たちが、『見事な精神』を呼ぶ、問題の勝利である。彼の党に対して、ベルギーの社会党員アンリ＝ドゥ＝マンによって、一三三年に、提案された経済計画は、従うべき実例を提供する。マンの場合の中で、計画経済論は、経済恐慌に対する解決法だけでない。計画経済論は、資本主義とマルクス主義的社会主義の間に、第三の道を構成するように余地がある、真の社会的原理である。それは、真の社会の計画である。マンの『労働の計画』は、三つの産業部門として経済を分けるよう提案する。国有化された公の産業部門、国家によって管理された産業部門＝カルテル化された大企業の産業部門、最後に、自由な産業部門＝小企業の産業部門。この計画経済論の説明は、フランスに、デアの新社会党員たちにあって、激しい利害を出合う。その説明は、社会党員たちにとって同様に、新社会党員たちにとって、恐慌への可能な解決法を構成する。二月六日の後、計画化の考えは、労組を魅惑する。労働総同盟とフランスキリスト教労働者同盟は、それぞれ、彼らの計画を公表する。同じレヴェルの思い付きは、三一年に創設された、計画誌（プラン）のグループを活気づける。三四年二月六日の直後に、多様な政治的影響下にある知識人たちを含む、グループは、フランスを因習から抜け出すため、J＝ロマンの周りに、A＝ファブルーリュス　Alfred Fabre-Luce　等々によって署名された、三四年七月九日の計画誌を提案する。知識人たちは、統制経済を創設する、強権的意味で国家の改革を促進する、及び国家の同業組合主義を創設するのを願う。急進党の脱党者と連立政策の創設者、ベルジュリは、時代の思想によっ

て獲得される。彼は、連立政策計画を公表する。恐慌への解決法を見付けるような意思から、全部の社会を組織するような意思まで進む、提示された計画の不統一性のその先に、統制経済は、新しい時代の不可避性として認められる。

技術官僚制の誕生　計画経済の流れは、要請を提起した。社会の異なった組織の不可避性。技術的能力は、イデオロギーに勝るはずであった。計画経済論は、技術官僚制の考えで引き離せない。現代社会は、有効に国会議員たちによって統治されることはできなかった。国会議員たちは、技術的能力に与えられた人たちを仮定する。人々が、後に『技術官僚的』という名付ける、流れは、生まれる。混乱したこの考え方は、企業長たち、国家の大集団のメンバーたち、最下級の地位の官公吏たち、知識人たちの利害を引き起こす。議会制度に反対する批判的な、実業界は、国家の改革の仮定を考察した。テーマは、技術官僚的意味で国家の構造の変化を強く勧めるし、変動を急ぐため、ためらわず諸団体を融資する、電気産業の大経営者、メルシエによって、二〇年代で創設された、フランス再建団に大切なものである。人々は、『X（理工科学校）危機』の名の下に有名な、経済的研究の理工科学校学生センターの中で、技術官僚的流れを見出す。計画経済論によって影響を受けた、この最後の人、クトロー J. Coutrot は、科学的に、従うべき政策を定義した、階級的協力の背景の中で、国家の干渉のお陰で、恐慌に反対して闘争するよう提案する。『新しい雑誌』の創設者、A＝ドゥトーフ Auguste Detœuf は、技術官僚的型の解決法に気持ちが傾く。最後に、三七年から、ヴォルムス Worms 銀行の幹部たちの一人、J＝バルノー Jacques Barnaud は、『新しい雑誌』あるいは『X危機』の協力者たちと一緒に、新しい原理を引き出すように、共産主義とファシズムの間に第三の道を定義するように、目的の中で、政治的及び社会的反省を導く。三〇年代の潜在的反議会主義及び合理的組織へのフランス社会の熱望を表す、多様な、分派のこの全体は、ヴィシー体制の下に、実業界から生じた一種の仲間意識、及び四一年から、国の指導的地位を奪うため、政治的陰謀を企てた。ヴォルムス銀行によって吹き込まれた、『集団指導体制』の神話は、育んだ。J－N＝ジャヌネイは、どんな提携の連続によって、この神話は、構成されたかを証明した。この流れの最も興味深い面は、面が、産業社会の増大する複雑さで仮定する、自覚、

及び三〇年代の中で引き出された、ヴィジョンである。

同業組合主義　三〇年代の中で開花した、同業組合主義の原理は、制限された界に対してその時まで限定された。その原理は、教会の社会的考え方の、及び労働者たちの保護を保証した、そして経営者たちと労働者たちの間に連帯の雰囲気を保存した、体系の調査の枠内で、一九世紀の末に生まれる。当時、個人主義の資本主義の上昇の前に、生産の共同体の組織を見出すことが、問題である。組織の要が、社会的カトリック教によって強く勧められた、同業組合主義は、主な理論家たちのため、一九世紀の末で、ラ＝トゥル＝デュ＝パン　La Tour du Pin とA＝ドゥ＝マン　Albert de Mun を持っている。アクシオン＝フランセーズによって熱狂で採択された、同業組合主義は、共和制の敵たちと同一視されるし、制度の支持者たちの不信を引き起こす。危機は、この原理に対して、関心を与えるであろう。同業組合主義の特別扱いは、三重である。人々は、それに、先ず最初に、経済的解決法を検討する。経営者たちと労働者たちの同業組合の内部に、結社は、生産の組織を認めた。同業組合主義者たちの理想は、『職業が、それ自体組織され』、彼らの製造と商業化の規則を固定し、彼らの最も資格のあるメンバーたちによって指導されるように、作り出すことである。資源を熟知することは、生活必需品を評価することは、及び危機を避けながら、生産を消費に適合することは、可能になるであろう。人々は、どのように、同業組合主義は、技術官僚制と計画経済論にほど近いか、検討する。三つの場合の中で、勝利する問題、それは、経済の合理的組織の意図である。この最初の特別扱いは、危機の産物である。第二の解釈、すなわち、教会に対してその原理を借りる、同業組合主義の社会的解釈についても、同様ではない。ここで、同じ組織の内部で、経営者たちと労働者たちの結社は、彼らに対話の習慣を与えたし、階級的協力を諸階級闘争の代りに置くように許した。危機の背景の中で、多数の知識人たちは、社会的諸闘争の追跡が、衰弱させた国に対して致命的な萌芽であるように、判断するだけ一層多く魅力的な考え。同業組合主義は、同業組合に対して、政治的役割を承認することに存する、同業組合主義の第三の特別扱いである。このレヴェルで、代表制の様式の問題は、提起される。普通選挙の数的データに建てられた代表制という

よりも、社会経済的代表制の選択は、自然の共同体のために、民主主義に対して明白な不信を表す。もしその代表制が、右翼への利害を引き起こすならば、同業組合の性格の政治的代表制は、技術官僚界及び計画経済論界、すなわち、新社会党員たちと急進主義の青年トルコ派と同様に、三四年七月九日計画誌界の注意を考慮に入れることは、注目する必要がある。これらの最後の青年トルコ派は、国家が、社会職業界によって、然るべく経済的生活の中で、新しい諸任務の中で介入することはできなかったように、考察する。同業組合主義は、技術官僚制の変形と計画経済論の欠くべからざる前提条件のように思われる。もし同業組合主義が、自分が『同業組合国家』であると願った、及び三九年に、諸ファッショと諸同業組合の会議によって、会議に取って代るために下院を廃止するに至った、ファシスト＝イタリアによって前面に押し出されたならば、ファシズムと同業組合的流れの間に、密接な関係を推理する必要があるのか。二つの場合の中で、同業組合主義が、自由主義の破産への返答として思い付かれることは、注目するように明らかである。事態は、もっと複雑である。イタリアに、同業組合主義は、国家が、経済に与えるように願う、刺戟の伝動者、そして社会について管理の手段である。フランスに、主な理論家が、L＝サルロン Louis Salleron である、同業組合主義は、自主的職業の組織の道具であろう。フランスを危機から外に出るように許す、新しい道を発見するように試みる、及び同業組合主義が、解決法を構成する、界の大部分は、自由主義的民主主義に愛着を抱いたままである。人々は、計画経済論、同業組合主義と技術官僚制を結び付ける、諸関係を強調した。ヴァレリが、危機を定義したように、西欧の文明の危機に直面して、ある精神の持主たちは、組織の諸形態を思い付くように努力する。三〇年代は、知識人たちを、ベルグソンによって提起された問題について、熟考するように見える。どのように、社会に対して、この精神の補足は、提供するのか。どんな諸原理の周りに、精神的再建に、すなわち、すべての刷新の欠くべからざる序言に達するため、諸エネルギーは、集めるのか。これらの社会的組織の目的の問題に対して、三つの流れは、異なった返答を提供する。

唯心論を流れ　最初の成果は、人々が、エスプリ＝グループを結び付け得る、及びカトリック教の環境を関心を抱く、

唯心論の流れによって提起される。三〇年に生まれた、青少年正統派、新教徒とカトリック教徒を集める、宗教的諸問題について、反省のグループの変化の新しい秩序誌という運動は、同じである。宗教的諸問題の検討から文明の諸問題の検討まで移って、これらの若い人々は、唯心論の性格の原理を考察するため、同じ反唯物論の飛躍の中で、資本主義と社会主義を拒否する。二つの書物は、それぞれ、フランスを衰弱に至らせる、無味乾燥な合理論を、及びアメリカの、生産至上主義の及び唯物論の文明のモデルを批判する。知識人たちは、この唯心論の原理を定義するのに当てられる、反省の努力に専心する。彼らは、生者の雑誌等々の中で、表現される。彼らの思想は、三つの軸の周りに組織される。最初に、人間の優位性を断言する、人格主義。第二の理由で、この優先権から、生産の消費に従わせる、経済的革命。最後に、人間に対して、自然の共同体を再統合するように認める、国家の地方分権化された組織。三三年から、新しい秩序誌の思想は、思想が生まれる、狭い枠を越えるし、唯心論の流れは、知界と政界を浸透する。この唯心論の流れの中でより多く、ファシズムと共産主義の急進的な及び矛盾した二つのモデルの中で、多数の知識人たちは、彼らの参照を探し求める、及び文明の危機に対してあるいは国民的衰弱に対して、解決法を見出すように試みるであろう。

知識人たちの約束　危機の時期の中で、社会への新しい根拠の調査は、知識人たちの使命の一部をなす、しかし、三〇年代の危機は、多数の思想家及び作家を、もっと遠く彼らの使命を押すように、及び彼らの同時代人たちに対して、政治的行動の中で係り合いしながら、従うべき道を指摘するように見える。知識人たちの約束のこの意思は、多様なやり方で現れる。ある人々に対して、それは、行動の、勇壮さの、自己の止揚の趣味であろう。共和的スペインの側に、武器を取る、マルロー、あるいは航空の暴険に向かって突進する、サン－エキュペリ Saint-Exupéry。知識人たちのこの約束に対して、政治的動機を探し求めることは、極端である。マルローは、人間のため、孤独な及び致命的な手段を見付けるより、彼の『形而上学の条件』の不安定から逃れるよりもっと政治的組織を心配していない。革命的主義主張に彼の生涯を捧げながら－彼は、マルクス主義者たちの旅の道連れであろう－、彼が狙う問題、それは、人類の幸福ではない、しかし彼にあっ

ては、人間の死命的条件が、引き起こす、苦しみによって提起された問題の解決法である。極左を選ぶ、マルローに対して、人々は、選択が、ファシストの活力論のため、ある好意で証明する、右翼に対して、モンテルランを対立させ得る。モンテルランのため、唯一の真理は、すべての行動に対して入手できるように、自分を愛することである。その理由は、ただ行動は、人間とその運命を高貴にする。約束は、当時のフランスの諸問題に対して、解決法を提案するような企てのようによりもっと、個人的な食べ物の被害への返答のように思われる。いずれにせよ、実存の諸問題を心配されられたこれらの作家たちを、彼らの食べ物の被害を解決するような手段として約束を考察するように見えるように、単純な事実は、彼の時期を作った、及び防衛すべき主義主張を構成しない、自由主義的民主主義と断絶して、三〇年代の間、歴史が、政治的心配によって社会的分野の侵入が、及びこれらの知識人たちについて、急進的諸イデオロギーが、行使する、魅力が、帯びる、比重をよく指摘することは、事実である。三〇年代の社会的価値と知識人たちの熱望の危機の岐路に対して、ファシズムの陣営にせよ、革命の陣営にせよ、多数の彼らの間の約束が、位置づけられる。

ファシズムの魅力　・知識人たちとファシズム。ファシズムによって知識人たちについて行使された引力は、三〇年代の驚くべき現象の一つである。この現象から、証拠は、多数である。これは、三〇年に設立された週刊誌、及び三六年に出版社の取消しの後、モーラス主義からやって来た若い知識人たちの指導下に、ぼんやりした輪郭に対してフランス＝ファシズムの表現になる、私は至る所である誌である。人々は、雑誌に対して、ごちゃまぜに、熱狂的な反ユダヤ主義、反自由主義、反共主義、新教徒たちへの敵意、しかし行動主義的神秘学、重大な価値の賞揚、青少年問題に信念、古い順応主義の断絶の意思を見付ける。R＝ブラジャック等々は、『国民的革命』の、ナチでよりもっとムッソリーニで、L＝ドゥグレールのベルギーのレックス党運動で、スペインのファランヘ党で彼の諸モデルを借りる、漠然としたファシズムの予言者たちになる。これは、ドリオのフランス人民党の人民のファシズムによって誘惑された、知識人たちの一群である。知識人たちは、共産主義から、穏和な右翼から、急進主義からやって来る。ドリュー＝ラ＝ロシェルのような、ある人々

は、ドリオの党に追い付く前に、あらゆる政治的競合の場を歩き回った。精神病の反ユダヤ主義が、彼から、よく染められたファシストを作り、ファシズムが、言葉のスターリン主義の説明の異なった真の共産主義になる、このグループの中に入れる必要があるのか。

• この最後の実例は、知識人たちの宣言された、ファシズムの現実、については、慎重さに仕向ける。もしファシズムが、世紀は苦痛を覚える、被害に対して、何も神秘な万能薬より別の万能薬でなかったならば、これらの素人の政治屋が、希望する、国民的再建の意思を言うため、別の名前か。この酷く感じ易い人、ドリューの自伝の小説に用心しよう。もしジル（ドリュー）、若いブルジョワが、『ファシズム』の中で、彼の救済を見付けるように信じるならば、それは、原理的諸理由のためではないし、社会的組織の型の選択によってではない、しかし、その理由は、彼は、ファシズムの中で、浄化する火を目撃する。ドリューは、四二年に、新フランス評論誌の中で、彼の行動の鍵を任せなかった。独立されたケースか。確かに、ノン。ブラジャックは、ブルジョワ的順応主義を拒否した、健全な青少年の喜びをファシズムの中で経験する。知識人たちの大部分にあっては、三〇年代のファシストの選択は、活力の選択、国民的衰弱への治療薬、『世紀の被害』への解決法である。それは、ファシストの活力論のテーマを繰り返して、彼の信奉者たちを、言葉の罠に捉えられるように妨げない。ドリューの自殺とブラジャックの処刑は、三〇年代の知識人たちにあっては、流行のファシストの様式の悲劇的な結末である。自分が革命的であることを願う、ファシストの様式。ブルジョワ的順応主義を拒否して、ドリュー、ブラジャックは、自分が革命的であることを願う。彼らは、左翼への約束を選んだ、人々の競争をよく知っている。

革命的誘惑　ファシズムのエリート主義の解決法が、満足することはできない、知識人たちの人々に対して、別の革命的モデル、共産党が提供する、モデルがある。二〇年代以来、多数の作家たちは、共産党に加入したし、あるいは共産党に接近した。戦争が、動転させた、すべての人々、すなわち、非順応主義で公言するし、二〇年代のフランス社会を拒否

する、すべての人々は、この時期で、はっきりした自由、共和的制度、契約の価値、彼らの固有な反乱への十全な政治的表現を再疑問視する、共産党の中で見付ける。共産主義と超現実主義は、兄弟である。一方は、政治の分野の中で、他方は、文化の場所の中で、三〇年代は、共産主義を、アラゴンからブロックまで、ニザンからエリュアルまで、バルビュスからCh＝プリスニィエまで、戦後の作家たちの世代の大部分を迎えるように見える。旅の道連れ、しかし行動的活動家、マルローの場合は、あらゆる演壇について、ディミトロフとテールマンの防衛者、共産党員たちによって組織された大衆的デモを呈示する。これらの作家たちを引き付ける問題、それは、原理として共産主義ではない、それは、共産党が、よりよい職人に見える、革命である。この選択の曖昧さは、はっきりと知覚できるし、多数のそれらの団体を自らファシストと称するに至らしめた、曖昧さより同じ自然に見える。三三年から、A＝ブルトン　André Breton（超現実主義の理論家）は、芸術に関して、共産主義運動の指令を承認するのに拒否されて、共産主義と縁を切った。三五年に、パリで、ジッドの主宰の下に開催された、『文化の防衛のための国際的大会』は、作家たちの動機と政治家たちの動機の間に、対立を例証する。率直な対立は、プルーストの様式の心理的分析の文学を非難する、マルクス主義者たちと、考え方に本質的な役割を与えるし、人柄のように人間を描くように要求する、多数のフランスの作家たちの間に、はっきりする。何も、これらの決定的な時期に回避するのに不可能な、しかし、互いに、共産党の近い革命家たちの陣営を結集させた、二人の聖なる作家たち、ジッドとロランの進展と同様に、知識人たちに対して引き受けるのに困難な、政治的選択の決定的比重を説明しない。楽しみと地の糧を賞揚する、仕事について彼の作家の名声を築いた、ジッドは、彼の時代の社会的順応主義の告発から、二〇年代のフランスの政治的及び社会的構想の、特に彼が、二七年の彼のコンゴへの旅行の中で激しく非難する、植民地主義の告発まで移る。彼は、彼の同時代人たちの社会的案内の、及び彼を、三二年から、共産党員たちに接近するに至らしめる、人類のために幸福の探求の役割の方へ進展を始める。彼は、共産主義の中で、ブルジョワの偽善から遠くに、人間の解放の原理を目撃する。共産党の旅の道連れである、彼は、革命的作家芸術家協会の雑誌、コミューン誌

の役員会に載っているし、諸集会を主宰するし、マルローと一緒に、ドイツ国会の火災の後に、逮捕されたディミトロフの訴訟を弁護するため、ベルリンで赴く。党の側で、この戦闘的な活動は、三六年に、ソ同盟に彼の旅行の経験を抵抗しない。彼が、ソ同盟で受け取る、心の込もった歓待にも拘らず、彼は、彼の幻想にも拘らず、共産主義が、社会が、彼にのしかからせる、強制から人間を解放しなかったように確認して、ソヴィエトの現実によって、裏切られた。それは、党で彼の断絶に、及びすべての政治的約束の彼の後退に辿り着く、論争を突如開始する、三六年に公表された。彼の書物、ソ連邦から回帰の中で打ち明ける、この確認である。戦前から有名な、人間主義の価値の防衛者及び一七年から、諸人民の解放の初まりのようにロシア革命を敬意を表する、防衛者、ロランの場合は、もっと興味が強い。ソヴィエト＝ロシアのデビューは、その希望に答えない、そして二〇年に、共産党の創設の時に、彼は、この点について、バルビュスと論争して、革命的暴力を拒否する。二〇年代の間、彼は、ガンディ＝モデルのように選んだ、インドの非暴力で、ソヴィエト＝ロシアの革命的目標を和解しようと試みる。三〇年代の初めで、この募金は、彼に無駄に見えるし、彼は、ファシズムと諸独裁の上昇に直面して、非暴力は、まやかしであることを、承認する。幻想なしで、ロランは、革命的暴力を必要悪として受け容れて、再び共産主義の方へ向く。彼が、有害性をよく知っている、政治的体系を保証するように非難する、人々に対して、彼は、有名になった、そして政治の道の中で積極的に関与した、多数のこれらの知識人たちの態度を特徴づけ得る、文章によって答える。『……私は、子供に似合う。……子供は、人間の未来の悲惨な希望である。』知識人たちの政治的約束は、フランス社会の基本的価値に到着する、この知的及び精神的危機の証言である。この研究の中で、人々は、新しい解決法を発明するような、困難を解決する余地がある決まり文句を想像するような意図によって襲われたままである。この独善主義の努力の中で、フランス風の何らかの知的ファシズムによって帯びられた形態を見る必要があるのか。ファシズムは、知界で、政治的分野で不在ではない。左翼のあるいは右翼の伝統的イデオロギーではない、すべての問題をファシズムに洗礼を授けない限り、この奇妙な結論に辿り着くため、ファシズムの弾性のあるヴィジョンは、拡大適用する必

要がある。襲う問題、それは、国に対して、思想を提供する手段を見付けるように、あらゆる世代の悲壮な意図である。確立された政治的勢力及び思想のように、その手段は、提供するように見えない、知識人たちは、強力な精神的留保を比較して、解決法を接合するように受け入れて、解決法を探し求める。新しい道の調査と知識人たちの約束の間、明白な矛盾が、存在する。三〇年代の精神の持主をマークする、調停の流れが、党派的な政治的諸グループへの復帰のために、三五年後、涸れる傾向があるように、特徴的である。互いに、新しい思想の調査に対して、多様な派を近づける、驚くべき相似は、左翼－右翼の伝統的な何時もの分裂に対して、場所を残すため、薄らぐ。三五年から、政策は、それらの権利を取り戻し、時間は、再び諸党のものである。それは、フランスの危機に対して解決法の企てを、及びもっと独創的な、人民戦線の経験を引き受ける、諸グループである。(五)

五　フランスの危機への解決法の企て、人民戦線（三四－三六年夏）

人民戦線の起源に対して、統一された熱望及び曖昧さの重み　二月六日の役割　人民戦線の神話体系の中で、左翼諸党が、長い間人民戦線を防衛したように、三四年二月六日は、創設者の役割を演じたであろう。国に重きをなす、ファシストの脅威を意識して、社共両党員たちは、ファシズムに対して妨害することはできる幅の広い同盟、次いで別の民主主義者たちに拡がった同盟を促進するために理解し合ったであろう。事態は、同時に異なっているし、もっと複雑である。

• 悪い諸関係、社共両党員たち……。三四年二月六日は、敵対関係が、結局、危険の自覚によって、消された、左翼諸勢力の散らばった整然とした反応を引き起こした。二月六日の際に、共産党は、二七年に、コミンテルンによって定義された『階級対階級』戦術を実践する。この戦術は、資本主義が、その諸矛盾が激しくなり、資本主義が、ソ同盟に反対して侵略の意図によって結着する、深遠な危機を知っていた、『第三期』の中に入れられた、分析に根拠を置く。現れ始める、

紛争の枠内で、共産党員たちの役割は、この戦術が、右翼のあるいは左翼のものであれ、ブルジョワジーに反対して闘争しながら、対立に準備されることである。この反ファシズム闘争は、コミンテルンのため、彼らの客観的な味方たち、すなわち、労働者階級を社会改良主義の因習の中で導くため、労働者階級を切迫した革命から反らせるように罪のある、社会党員たちである、人々に広がる。その結果、共産党の眼で同様にコミンテルンの眼で、真の危険は、ブルジョワジーが知っている、崩壊の段階の証言である、ファシズムに、しかし革命で堕胎を施す、社会民主主義にその基礎を置かない。それは、有名な決まり文句を表す。『ファシストの木は、社会民主主義の森を隠すはずではない。』これらの条件の中で、共産党員たちによって誹謗された、社会党員たちは、共産党員たちの主導権のための不信及び厳しい非難を抱いている。共産党員たちが、『統一戦線』を強く勧める時、社会党員たちは、共産党の指導者たちの意図を、社会党員たちを彼らの指導者たちと引き離しながら、彼らに社会党の加入者たちを引き付けるように、古い共産党指導者トラァンの決まり文句を適用するように、表す必要があることを、よく知っている。『手が、家禽を羽をむしるため……家禽の方へ緊張するように、社会党員たちの方へ手を差し伸べる必要がある。』

•……及び急進党員たち。社共両党員たちの間の敵対関係で、急進党員たちと二つの極左の政党の間の不一致は、付け加わる。急進党員たちと共産党員たちは、とても人々が、彼らの話題で、反則的敵意で話し得るので、異なっている二つの惑星に所属する。どんな共通点は、中産諸階級を代表して、国防に執着された、民主主義的合法性に夢中な、社会改良主義的党、と国際主義的な及びプロレタリアート独裁を確立するのに狙って、革命的党の間に存在できるのか。急進党員たちと社会党員たちの間に、国政選挙の第二回投票で立候補取り下げの実践、及び二四－二六年と三二－三四年に、左翼の多数派で共通の所属によってマークされた、長い一連の接触は、確立された。これらの二つの企ての失敗は、二つの組織、すなわち、急進党員たちに対して、三四年に同様に二六年に右翼と理解し合うため、多数派を断ち切ったように非難する、社会党、と社会党員たちを、急進党諸内閣にもたらされた一時的な支持の不安定さによって、彼らの政府の経験を

失敗させたように非難する、ヴァロワ地方の人々の間に、激しい恨みを引き起こした。

• 競り上げの時期。三四年二月六日は、三つの左翼の政党の間に、これらの悪い関係を変えない。人々は、二月六日の直後に、社会党員たち、急進党員たち、多様な民主主義者たち（共産党員たちのない）を含んで、自然発生的に『反ファシズム諸委員会』を形成されるように見える。社共両党員たちは、激しく、エリオと、右翼の側で、ドゥーメルグ政府の中で入閣したため、急進党諸大臣を攻撃する。共産党に、党の新聞に、統一労働総同盟系労組については、共産党員たちは、『社会ファシストたち』を、『ファシズム』の方へこの漸次的移行の始まりにいるように非難する。三四年春の末まで、共産党の行動は、『階級対階級』戦術の所轄である。三四年二月九日、共産党と統一労働総同盟は、『ファシズムに反対して』と『ダラディエとフロー銃殺者どもに反対して』というスローガンの周りに、レピュブリク広場について、大連合を組織する。共産党員たちが、ファシズムの最も決まった敵たちである、しかしデモの機会であれば、ファシズムと政府の間の合体を実現する必要であるように、指摘することが、問題である。デモは、警察に反対して数時間の戦闘によって、及び六名の死者たちと数百名の負傷者たちによって結着して、極端な暴力の雰囲気の中で、展開される。三四年二月一二日、労働総同盟が、ゼネストのスローガンを発したし、及び社会党が、ヴァンセーヌ大通りとナシオン広場について分列行進を組織したし、共産党と統一労働総同盟は、ストに及びデモに加わるように決定する。共産党員たちが、彼らの固有な指導者たちの活力より上の活力を表現することを、それらの集団に指摘しながら、社会党諸集団をストをさせることが、問題である。共産党員たちは、分列に沿って、彼らの演説者たちが、群集を演説したし、社会党の行列を風化させたことを、予測した。二月一二日、それは、生じる、逆のことである。共産党の活動家たちは、共産党の舞台と演説家たちを放棄して、社会党の行列に加わる、そして、『統一！統一！』の叫び声で、二つの党の活動家たちは、協力して分列行進をする。二月一二日、統一されたデモがあった、しかし、二つの党の指導者たちは、デモに理由のないことではない。

• 最初の企て、失敗。二つの左翼の政党の維持された、この敵対関係は、二つの反ファシズムの連合の企てが、知って

いるように、認められる。共産党の主導権の、最初の企ては、二人の共産党にほど近い平和主義的作家たち、バルビュスとロランの主宰の下に置かれた、アムステルダムープレイエル委員会である。三二年に、委員会の創設の時、戦争に反対して闘うことを目標として持って、目標は、委員会に、三三年に、ファシズムへの反対を付け加える。委員会の書記局は、労働総同盟と統一労働総同盟というサンディカリストたちより、社会党の、急進党の、色々な共和的ー社会党的グループのメンバーたちより、及び芸術、文科と理科の世界の多数の重要人物たちより、成立つ。二月六日の後、別の左翼の諸政党は、職権によって、ロランとバルビュスの後ろに、『家禽を羽をむしる』ように用意のできた手を見て、アムステルダムープレイエル委員会に加入しようと拒否する。第二の企ては、左翼の重要人物たちに帰すべきである。三三年三月に、急進党代議士ベルジュリの、社会党員ボネの、共産党にほど近い、学者ランジュヴァンの、及び反ユダヤ主義に反対する国際連盟の議長、B＝ルカシュ　Bernard Lecache の主導権に、共同戦線は、創られる。共産党代議士ドリオは、この組織に対して彼の関心を表明する。別の諸政党によって緊張させられた罠に掛かるように酷く恐れて、全左翼の政党は、ぱっとしない、活動を支持するように拒否する。ドリオが、サンードゥニで、二月六日の直後に、共産党員たちの側で、社会党員たちと労働総同盟のメンバーたちを含む、『反ファシズム行動委員会』を構成する時、彼は、三四年五月に、ドリオが、非難する、コミンテルンの前に、紛争をもたらす、共産党によって否認される。三四年六月に、共産党からドリオの除名は、上部組織で行動統一政策の拒否のように思われる。一か月後に、ドリオが、大成功というチャンピオンを作り出された、政策、及び彼の主唱者を除名するばかりである、共産党の事実から当然。

コミンテルンの方向転換　三四年六月末、イヴリー全国協議会の間に、共産党の新しい路線は、認められるようになる。共産党の指導者たちの演説の大部分が、『階級対階級』戦術の全体性の中で留まるのに、トレーズの最後の演説は、新しい言い回し、すなわち、数日後に、主な共産党の指導者によって確認された言い回しで、社会党員たちと一緒に、行動統一を要請する。二月六日以来、ある共産党指導者たちが、コミンテルンの傍らに、階級対階級戦術の目的と社会党と協定

の可能性を手に入れるため、主張したことを、確認する、共産党歴史家たち、と主導権が、モスクワからやって来た、及び共産党が、三四年六月末、コミンテルンで言うなりに及び目で彼の服従を証明する、一八〇度で急転換を実行したことを、評価する、別の歴史家たちの問に、維持された論争的討論の中で干渉しないで、人々は、コミンテルンが、この時期で態度で変える、及び共産党を人民連合の新しい戦術の中で入るように求めることを承認するため、全員一致は、作られることを、考察できる。

• 何からこの戦術は成り立つのか。共産主義に、社会主義に及び民主主義に結着を付けた、ヒトラーの政権への到着の結果の分析以来、ファシストの危険は、コミンテルンによって、付随的なものとして、しかし優先権を持つとして考察されれない。長期の党の革命的目標を断念しないで、共産党は、緊急が、社会党員たちに及び全民主主義者たちの結び付けながら、そしてブルジョワ的諸自由の防衛から、広い反ファシズム連合の基礎を作り上げながら、ファシズムへの道路をふさぐことであるように、判断する。それは、人民戦線への道を開く、態度のこの変化である。もし下部組織での統一された熱望が、二月六日以来、明白であるならば、三四年六月末、共産党の新しい態度は、この新局面を開く。それは、この決まり文句の原因である、共産党の主導権である。

人民戦線の構成　その構成は、人民連合の新戦術を活用して、二つの時期に干渉する。

• 社共行動統一協定。最初の時期の中で、社共両党員たちの問に、上部組織での討議は、社共行動統一協定の、三四年七月二七日、署名に行き着く。二つの組織は、互いに批判されるように避けるのに掛かり合うし、ファシズム、戦争及びドゥーメルグ政府によって準備された、緊急政令に反対して闘うため、合意して身を置く。両党間の協商は、三六年まで、この日付まで、相次ぐ、国民連合諸政府、すなわち、ドゥーメルグ政府の後、フランダン（三四年一一月―三五年五月）とラヴァール（三五年六月―三六年一月）諸政府に、この二重の反ファシズムの及び敵対する動向を維持したであろう。辛うじて、社会党員たちは、共産党が、彼らを右派にあふれることを、二つの労働者党のこの接近を喜ぶように時間がある。

三四年一〇月に、ナントで、僅かの時間の前に、社会党員たちが、連合の内部に、急進党員たちに結び付いた以上、社会党員たちに『社会裏切り者たち』を目撃した、トレーズは、『労働者階級と中産諸階級の同盟』を実現しながら、すなわち、急進党に対して、反ファシズムの連合の中に入会するように提案しながら、プロレタリア連合を人民連合に変えるように提案する。諸共産党の新しい戦術に合致した、この提案は、重大な障害物に対して、エリオと彼の友人たちが、共産党について感じる、不審の側に、僅かの事態である、急進党員たちが存在する、自由主義者たちと結び付くのに、社会党の悪意を衝突する。共産党の提案は、そこに罠を見る、急進党員たちによって、深遠な懐疑的態度で迎えられる。

• 急進党員たちの加盟。三五年六月に、急進党員たちは、最後に、共産党員たちが、しつこく、三四年秋以来、更新する、申し出を受け入れる。三つの理由は、人民戦線の中で、社共両党員たちの側で、急進党員たちのこの驚くべき入会を説明する。―最初に、急進党の内部に、改新的な流れ、現代フランスの諸問題に擦り減らされた、急進主義の適用を試みるのに執着した、青年トルコ派の流れの存在。この多様な流れの中で、左翼同盟の枠内でこの急進主義の刷新を目撃する、グループ、ゼイ、ケイジェル、コット、マンデース＝フランスのような人たちによって活気づけられたグループが、存在する。これらの左翼の青年トルコ派は、彼らの党が、人民戦線を受け入れるように願う。彼らは、政治的展望が、二月七日の彼の辞職以来、ふさがれる、青年トルコ派のほど近かった、及び人民戦線の中で、左翼の流れでリーダーとして自分に与えながら、政治的帰還の機会を目撃する、ダラディエによって結合される。その理由は、エリオは、人民戦線に対して保留される。―第二の説明の要素。もし急進党員たちが、休戦の諸政府の中で、右派の及び中道派の諸政党に対して結び付けられるならば、彼らは、この同盟の満足から引き出さない。彼らが、結び付けられる、諸政党の指導者たちは、彼らを無能で、更にはスタヴィスキー事件の事実から当然、腐敗で非難して、彼らについて、仮借なく攻撃する。タルディユーは、ショータンを非難するまで、スタヴィスキー訴訟の移送で罪のあるように、同時に進行する。政府に対して、彼の味方たちによって口汚く罵られた、急進党は、フランス大革命の相続者及び中産諸階級の代表者の彼の役割を賞揚する、

共産党員たちによって称賛の言葉で覆われている。行為は、続いて起こる。三四年秋の県会議員選挙から、共産党は、左派にマークされた、急進党員たちの前に、党の立候補者たちのある人々を取り下げるように受け入れた。いずれにせよ、共産党員たちと多数派の諸党の間に、態度の相違が、多数のヴァロワ地方の人々の責任者たちを、諸同盟の転覆を準備する、反省に導くのは、事実である。この進展は、仏ソ協定の、三五年五月に、署名によって、及び宣言（スターリン）、すなわち、共産党が、国防の努力を主張するし、愛国的な党をもって任ずる、宣言の採用によって、容易にされる。―第三の理由は、党の左派にあるように政治的意図と、中道派の及び右派の意思のほど近い党の経済的ヴィジョンの間に、矛盾の所為で、急進党が、結局、閉じ込められた、政治的行き詰りを切望している。三二―三四年の党の政府的経験は、この矛盾が、党を無能に導くことを、指摘する、そして党は、二月六日以来、行き詰りから外に出るように手段を探す。三五年春で、党は、第三政党の中で解決法、すなわち、フランダンによって代表された中道派―右派で集中を見出すように信じた。三五年の市町村議会議員選挙は、第三政党の経験のために失望させるし、急進党の活動家たち及び責任者たちの大きな数は、社共両党員たちと協定のために弁護する。彼が、主宰する、党の困難で意識のある、エリオは、非とする、人民戦線の方へ急進党活動家たちを引き連り込む、抵抗できない魅力に対して自由なゆとりを取って置くように決定する。三五年七月三日、彼の主宰の下に、急進党執行委員会は、社会党員たちの、共和的―社会党員たちの、共産党員たちの、人権同盟の、二月六日の直後に形成された、反ファシズム知識人監視委員会の、左翼の諸結社の在郷軍人たちの……傍らに、三五年七月一四日の統一されたデモに参加するように決定する。七月一四日、三四年二月一二日のデモの移動について、ダラディエは、左翼の諸政党と諸結社の指導者たちの傍らに行列を作って進む。翌日、デモ組織委員会は、全国人民連合委員会に、すなわち、七月一四日、一緒に列を作って進んだ、一〇の組織の代表者たちを集める、機関に変化する。この委員会の任務は、三六年四月―五月の国民議会議員選挙の第二回投票に対して、左翼の立候補者たちの間に立候補者の取り下げの基礎に仕える、共通の政綱を要点を絞ることである。

人民戦線の綱領及び曖昧さ　・穏健な綱領。人民連合組織委員会の内部に、綱領について、討議は、社会党員たちの見解と急進党員たちの見解の間に、はっきりとした反対を明らかにする。もし広い協定が、反ファシズム闘争の不可避性について作られるならば、経済的及び社会的措置は、激しい討論の対象になる。社会党の代表たち、オーリオールとジロムスキーは、綱領が、社会党の綱領を構成する、及び『ブルジョワ』政党を含む、政府への社会党の参加を正統化したであろう、これらの構造的改良の中の幾つかを含むことを、望む。急進党員たちは、恐慌を阻止するため、新政党の定義のその先に進まないで、及び自由な経済的組織の枠内で留まるのに決心している。彼らは、いかなる革命的性格を持っていない、及び急進党諸大会が、一四年戦争の前から、受け入れた、国有化を拒否する。それは、勝ち取る、急進党員たちである、そしてそれは、共産党の支持のお陰で。どのように、共産党のこの突然の節度は、説明されるのか。二つの説明の構成要素は、仕事をはかどらせ得る。第一の要素は、共産党員たちの眼で、国有化が、社会主義的性格の措置のように思われない、しかし、資本主義を一時的に取り繕うように余地のある改良のように思われることである。国有化は、国有化に関して、関心なしである。第二の要素は、共産党員たちにとって、優先権を持って、人民戦線の反ファシズムの目標、すなわち、中産諸階級の加入を要求する、目標に切望している。これらの条件の中で、急進党員たちは、人民戦線綱領が、古い急進党の綱領とは異なった何もないことを、確認できるであろう。

この綱領は、三大項目でつながる。人民戦線に対してスローガンに仕える、パン、平和、自由。綱領の本文は、二つの欄に組織される。政治的諸要求と経済的諸要求。政治的レヴェルについて、諸自由の防衛は、全員一致の賛同を得る。その防衛は、諸団体の解散、労働組合の諸権利の及び宗教から独立した学校の防衛と出版に関する措置、諸新聞について、それらの総括を知らせるように義務を含む。それは、日刊紙と週刊紙に対して、利害グループによって、与えられた補助金について、公衆に知らせるように。諸自由の防衛と比べれば、平和の防衛は、明確な政治的選択の考えを引き出すことは、困難である、漠然とした方式の組み合わせである。急進党員たちの同意で、フランスの対外政策について『死の商人

たち』の圧力を避けるように、及び政府の手の間に、国の防衛の手段を置くように、軍需産業を国有化することは、予知された。

経済的諸問題に捧げられた、及び人民戦線の妥協の性格が、はっきりと現れる、綱領の一部は、もっと重要である。この綱領は、革命的ではない。幾つかの大きな改良は、綱領で含まれた。人民戦線の立役者たちが、『二〇〇家族』の、すなわち、総会に投票し、制度を統治する、理事たちを選ぶ、二〇〇の大株主たちの影響力に銀行をかすめ取りながら、『仏国銀行』を作るように要求する、フランス銀行は、最も重要に関係がある。この経済的欄は、不景気の初め以来、あらゆる政府に自分を押し付けられる、選択肢を逃れるように試みながら、反経済恐慌闘争の直接的綱領を予測する。『デフレはない、平価切り下げはない』を、人民戦線綱領は、提案する。どんな解決法か。経済的生活の中で、国家の干渉によって、大衆の購買力の上昇、経済的機械を始動させるように認める、『リフレーション』。社会主義の理論からよりもっと、ニュー＝ディールのアメリカの経験から吹き込まれた、この統制経済の綱領は、多数の措置によって活用されるはずである。大土木事業、失業資金の設立、老人労働者たちのために退職金、賃金の減少なしの労働時間の削減、そして、農業に関して、全国穀類公団の創設。反デフレ闘争のこの背景の中で、三五年に、ラヴァールによって取られた緊急政令の廃止は、全員一致の賛同を得ることを、付け加えよう。右翼によって吹き込まれたどよめきにも拘らず、人民戦線綱領は、最も目に余る社会的不正に対して、解決法をもたらしながら、恐慌を解決するのに、及び国家の共和的形態を保存するのに当てられる、穏和な政綱として現れる。この綱領は、共産党員たちに広げられた、この新しい左翼連合の立候補者たちの第二回投票に対して、立候補の取り下げの基礎である。第一回投票に対して、人民戦線の諸政党のそれぞれは、その固有な綱領を防衛する。このレヴェルで、人民戦線は、活動家たちの熱狂が、包み隠し得る、しかし、それでも、基本的なままである、ある数の曖昧さを含む。

- まちまちな熱望。人民戦線の骨格を構成する、三つの政党のために、人民戦線の目的は、異なっていることは、明白

である。人民戦線の主導者たち、共産党員たちは、二重の戦術を享受する。短期について、彼らは、中産階級を反ファシズムの連合に結び付けるように、急進党員たちをうっとりさせた、及び社会党員たちを失望させた、節度のカードを前面に押し出した。彼らは、締結された同盟を、社会党員たちと急進党員たちが、合意しているように、明白ではない、反ファシズムの決定された政策を期待する。全員一致は、内部にファシズムへの道をふさぐように不可避性について、人民戦線の立役者たちの間に作られる、そして連合によって考察された、反諸団体闘争は、この協定を保証する。共産党員たちにとって、三五年に締結された仏ソ協定に基づきながら、外部なファシズムに反対して闘争することが、問題である。この輸出の反ファシズムと人民戦線の平和の維持の綱領の間に、矛盾は、出現できる。急進党員たちの大部分の、社会党員たちの、サンディカリストたちの、反ファシズム監視委員会のメンバーたちの、人権同盟の加入者たちの大多数は、納得された平和主義者たちであるし、平和を維持するような彼らの意図は、彼らの反ファシズムに打ち勝つ。直接的諸目標について、共産党員たちと人民戦線の二つの別の政党の間のこの対立は、トレーズの党の、長期で、諸目標に重きをなす、疑いと比べれば、何もない。党の協力者たちのために、共産党は、党の革命の意図を放棄したことは、明らかにする。党は、明らかに、人民戦線を、及び穏和な戦術を利用するように要求する。三つの実践は、この戦略を例証する。全加入者たちに開かれた、人民連合県諸委員会の構成の意図、社共両党の間に、組織的統一の提案、労働総同盟を統一労働総同盟という諸労組の融解。第一の点について、急進党員たちと社会党員たちの決まった対立は、共産党員たちを引き下げるのに義務を負わせる。人民連合県諸委員会は、存在した、しかし、諸委員会は、一〇の構成する組織の代表団たちで形成されるし、個人的な諸加入は、諸委員会にあり得ない。社共両党の組織的統一について、交渉は、果てしない討議の中で身動きできなくなるであろう。労組の再統一は、成功であるだろう。三六年三月に、労働総同盟と統一労働総同盟は、新しい組織が、この名前とこの略号を保存する、そして、共産党員たちが、ジュオーによって提起された全条件を受け入れる、労働総同盟によって共産党センターの吸収の明らかな基礎について、トールーズ大会で合併する。再構成された統一の正面、

及び同盟局でフラションとラカモンの少数派の立場の後ろに、共産党のサンディカリストたちは、彼らの組織を保存するし、彼らの活力は、労働総同盟の内に労組の『家禽』を『羽をむしって』、彼らを下部組織の諸労組と県諸連盟を獲得するように認めるであろう。共産党員たちと二つの別の政党の間にこれらの緊張で、急進党員たちと社会党員たちの諸対立は、付け加わる。内部の反ファシズムに合意して、共産党の諸計画について疑い深い、共産党員たちは、経済恐慌の解決法について一致しない。社会党員たちは、急進党員たちが、経済恐慌の国を外出するため、市場経済を当てにして、自由主義者たちに留まるのに、必要な権威の策を講じる、国家の管理の下に、経済的政策で企てる。長期の、これらの相違は、人民戦線の経験を徐々に蝕むであろう。最初の時期に、人民連合の積極的結果、その連合が、左翼の世論の中で引き起こす、熱狂、そして共和派的規律の機械的結果は、連合を選挙の勝利に導く。

人民戦線の選挙の勝利及びブルム経験の性格　見掛け倒しに選挙の勝利　・キャンペーンの展開。三六年四月に開く、選挙のキャンペーンは、諸矛盾を欠かさない。第一回投票の見解の中で、人民戦線の諸政党のそれぞれは、党の固有な計算のために、及び人民戦線綱領によって、第二回投票のために予知された、政綱から離れたやり方で、キャンペーンをする。社会党員たちは、統一の神秘学に演じるよりむしろ、古典的イメージを与えるから離れないことを示す。彼らは、反資本主義的改良の、国有化の規模の大きな綱領を呈示しないのか。彼らは、上院の廃止と比例代表制の確立を要求しないのか。急進党員たちにあっては、同じような古典主義。もし、上部組織で、ダラディエが、信用の国有化あるいは軍需産業の国有化として精力的な基本的な諸改良を要求するために、ジャコバン派の強調を見付けるならば、彼らの選挙区の中で、急進党の立候補者たちは、偉大な先祖代々の人々への、及び地方的利害の防衛の綱領で、革命的理想への準拠を混ぜる。共産党のキャンペーンは、もっと独創的になる。未来のため、『フランス＝ソヴィエト共和国』を確立するのを断念しないで、党は、恐慌とファシズムに反対して闘争するように二重の不可避性について強調する。この目的の中で、トレーズは、団結を共産主義の決定された敵たちを除外しないで、共産党書記長が、『手を差し伸べる』、カトリック教徒たちあ

るいは火の十字架団のように、全フランス人たちの団結を要請する。それらの果実をもたらす、巧妙なキャンペーン。その理由は、共産党は、第一回投票の偉大な勝利者のように思われる。

• 制限された勝利。四月二六日の夕方で、たとえこの勝利が、ある人々が、希望しただけ輝かしい勝利ではないにしても、人民戦線は、打ち勝つことは、明らかである。活気づけられたキャンペーンにも拘らず、記録という選挙の参加で（登録された選挙人たちの八四、三〇％は、投票した）、人民戦線は、選挙の高潮を引き起こさなかった。総体的に、人民戦線を引き合いに出す、諸政党は、五四二万票、すなわち、すでに左派への有利な、三二年の国政選挙の時、これらの同じ政党によって集められた票より三〇万だけ多く、合計する。三二年に敗北した、右派は、彼の重大化された敗北に遭遇しない。その理由は、四二三万票で、右派は、直ぐ前の国政選挙と比べて、七万票を失う。人民戦線の内部に、票の配分は、教訓で豊かになる。右派諸政府への彼らの参加によって、及びデフレ政策への彼らの長い支持によって妥協された、急進党員たちは、三五万票を失ったし、中産階級の彼らの選挙民の一部を、別の左翼諸政党の方へ向かうため、彼らから外れるように見えた。社会党員たちは、三二年と比べて軽い後退を記録して、しかし急進党員たちを追い抜いて、二〇〇万票の周りに、停滞する。最も人目を引く結果は、議会への六一補充議席を獲得して、党の三二年の票を二倍にする、そして、第一のレヴェルの政治的勢力、左翼多数派のメンバーのように思われる、共産党の結果を留まる。人々は、勝利が、共産党の利点の勝負をするように考える、人目を引く勝利。いずれにせよ、人民戦線の勝利は、五月三日、第二回投票への左翼諸政党によって、実践された規律、すなわち、連合の諸政党に対して、右翼への二二二議席に対して三七六議席のはっきりと多数派を与える、規律よりもっと選挙民の圧力に切望していないことは、事実である。極左に役立って、はっきりと選挙の勝利の印象（初めて、フランスの歴史の中で、社会党は、左翼の最初の政治的勢力であり、共産党員たちは、彼らの代議士たちの数を六倍にする）は、議会の計算の考慮によってニュアンスを与えるはずである。二一九人の代議士たちで、社共両党員たちは、正確に、右翼の代議士たちの数を均衡を取る。人民戦線の多数派は、一〇六人の急進党員たちの補助のお陰

で、存在する。急進党員たちは、二六年にあるいは三四年に同様に、穏和派の方へ倒れるということ、及び多数派は、結局、ひっくり返された。四月二六日、選挙人たちによって敗北した、急進党員たちは、多数派を作るあるいは解体するにつれて、調停者たちの立場に見出される、そして彼らの議会の力は、彼らの党が、党の衰退を始まる時に、フランスの政治的ゲームの現実の主人たちを作る。社会党の圧力が、初めて、社会党の指導者に対して、権力の門を開く時に、三六年五月に、そのようなものは、上辺にはない。

ブルム実験の諸性格　社会党員たちと権力の要求。三六年の国政選挙の諸結果は、フランスの政治的生活の中で、未刊のリーダーの場合を描く。人々が、急進党員たちを、議会レヴェルについて最初の左翼の政治的勢力に留まるように見えるのを予期したのに、論理的に、社会党員たちが、参加できた、ダラディエ政府への導くはずであった、問題、社会党の議会の優位性は、社会党の方向への政府の仮定を妥当と思われるようにする。すべての投機に及び彼を、ユダヤ人だから、退けた、及び彼をオーリオールあるいはフォールも、反対した、策略に手短かに打ち切るために、ブルムは、五月四日から、ル＝ポピュレール紙の中で、未来の政府の方向への彼の立候補を提起する。『社会党は、共同行動の中で、責任と党に戻る、役割を要求する。それは、議会の前に現れるはずである、人民戦線政府である……。われわれは、従って、われわれは、われわれが、所属する役割を満たす、すなわち、人民戦線政府を構成し、指導する用意のできている、時間を失わないで宣言することに切望している。』責任者たちの間に、誰も、社会党員たちに対して、未来の政府の指導部を異議を申し立てることを考えないし、それは、政府を構成するように責任が、戻る、ブルムのものであることは、間違いない。社会党は、社会党が、行使する積もりでいる、政権の性格の問題は、提起されないため、ブルジョワ政府への党の参加の仮定まで推測するように拒否した。二〇年代以来、ブルムは、社会主義と権力によって提起されたあらゆる問題のことを、及び、社会党が、割り当てる、革命的目的（社会革命、すなわち、諸構造の深遠な変更）と権力の行使自体の間の対立のことを、熟考した。社会党員たちが、政府に、社会革命より別の事柄を作るために、政府に対して参加することは、望ましいのか。問題は、第一次大戦後の色々な

選挙の相談が、社会党員たちの参加なしに左翼の多数派の構成を不可能にする時、社会党員たちの増加する支持より一層多く激しさで、提起される。二四年に、左翼連合の勝利は、最初の試練を構成する。社会党大会によって批准された、ブルムの返事は、同時に、ジョーレスの教訓に忠実な、社会党が、拒否できない、社会改良主義の可能性、と社会主義が、その特殊性を失ったし、社会的裏切りの共産党の非難に攻撃の機会を与えたことなしに、原理的純粋さを、慎重に準備する。それは、『参加なしで支持』である。社会党員たちは、政権に参加するように拒否する、しかし議会への彼らの投票で、その政府が、改良的政策を実践するという条件で、左翼的政府を支持する。彼らを、政権の現実を無視するように、及びすべての約束を避けるように認める、しかし二四年の多数派を失敗に導くし、社会党の内部に批判を引き起こす、目的に合った態度。

・ブルムの権力の理論。次の国政選挙が、社会党の継続的な進展を明らかにし、問題は、もし社会党が、ある日、左翼多数派の支配する要素になるならば、過ぎ去る問題を知っているように提起される。ブルムの返事は、『権力の獲得』を『権力の行使』から区別することにある。権力の獲得は、社会党によって、あるいは社共両党によって、国政選挙の後に（その理由は、ブルムは、暴力的手段、レーニン主義の革命という様式を拒否する）、議会に対して、議席の多数派の入手の結果として生じた。人民は、二つの『プロレタリア』党によって褒めそやされた、社会党の意味の中で、フランスの社会的諸構造を変えるような委任を、多数派に預けたであろう。資本主義的制度で、権力の行使は、社会党員たちが、最も多数であり、多数派が、急進党のようにブルジョワ政党の投票の援助のお陰で、打撃を受けられる、左翼の多数派の勝利によって実現された、リーダーの場合である。この場合の中で、多数派は、所有の制度を変えるような、及び構造的諸改良を行うような委任を、人民から受け取らなかったし、多数派は、資本主義の変わっていない諸構造の枠内で、社会改良主義的な社会的実践で喜ぶはずであった。ブルムは、ファシズムの想定された脅威の前に、別の概念、社会党員たちによって『権力の占拠』の概念を付け加える、差別。三六年の国政選挙は、ブルムによって控え目な仮定の一つ、社会党員たちが、支配す

る要素である、左翼多数派の仮定を実現する。それは、彼が、政府の先頭に立つ数日前に、三六年五月三一日、社会党全国評議会の前に、状況で作る、分析である。『社会党は、多数派を持っていないばかりではない、しかし、プロレタリア諸政党は、多数派を持っていない。社会党の多数派ではない、プロレタリアの多数派ではない。人民戦線綱領が、軌跡である、人民戦線の多数派である。』ブルム経験は、社会主義の経験ではないので、自由主義の及び資本主義の経済の伝統的諸構造の枠内で、社会改良主義の経験である。ブルムが、すべての革命的展望を拒否する時に、ある人々が、革命的なものとして判断する、雰囲気は、国の中で居を定める。

三六年五月―六月のスト　・動きの広さ。三六年六月四日、ブルムが、彼の政府を形成する時、フランスは、物凄い社会的爆発、二〇〇万のサラリーマンたちと関係がある、工場、仕事場、百貨店、更には農場の占拠でストの波を熟知する。これらのストは、色々なフランスの地方の中で、及び多様な要求のために、散発的に勃発した。最初の時期の中で、ストは、特に航空機工場と関係がある。動きによって最初の打撃は、五月一一日、アーヴルでブレゲ工場（一三日、ラテコエール工場、一四日、ブロック＝ドゥ＝クールブヴォワ工場）である。後を追う、数日の中で、動きは、伝染の現象によって、別の隣りの企業で打撃を受けて、じわじわと広がる。五月末頃、大きな新聞は、同時に、現象の広さと、特殊な形態を強調しながら、世論を気付き、急を知らせる。工場占拠でストが、重要である。それは、ある観察者たちの眼で、彼らの工場について、経営者たちの所有の原理自体を疑問視するように見える。もし人々は、航空機工場が、この動きの恵まれたセンターであり、人民戦線綱領が、軍需工場の国有化を含むことを観察するならば、人々は、注意深い観察者たちが、三六年六月のストの中で、社会革命の、労働の道具を押収して、及びこの酷く恐れられた社会主義革命を事を行って、彼らの労働者たちによって経営者たちの巨大な財産接収の初めを、目撃できたように理解する。

・社会革命が問題であるのか。ストは、自然発生的に生まれる、そしてあらゆる研究は、たとえ有名な活動家たちが、彼らに諸要求を導くとしても、いかなるスローガンが、何らかの政治的あるいは労組の組織によって与えられなかった、

結論に到達する。ストの勃発の諸理由は、地方的である、しかし、地理的に隣りの工場の中で成功された、あるいは類似した活動を実践し、ストの実例が、伝染の現象を引き起こしたように、疑う余地がない。経営者たちにメーデーの伝統的ストのリーダーたちを解雇するように妨げるため、ストの工場の中でキャンプをする、サラリーマンたちまで、その国有化を容易にするため、ストの企業を占拠して、航空機工場の労働者たち以来、あらゆるリーダーのケースは、並ぶ。左翼の選挙の勝利の幸福感のスト、見出された労働者の威厳のスト、労働運動の圧迫の長い時期の後、ストレスの解消のスト、S＝ヴェイユの表現によれば、『喜びのスト』、それでも、これらの動きは、フランスに、ある人々が、革命的なものとして判断する、雰囲気を一世を風靡させる。『すべては可能である』と、三六年五月二七日のル＝ポピュレール紙の論説の中で、ブルムに、権力の行使を権力の獲得に変えるため、人民運動に基づくようにせっつく、ピヴェールは、書いた。すべては可能である。すなわち、ある人は、ブルムに、彼の勝利が、生ませた、状況を解決するため、権力を握るように求める、首相、急進党員サローの感情である。彼は、合法的諸形態に対して、ブルムの愛着に衝突する。社会党のリーダーは、三二年に選ばれた議会の委任が、期限切れに達しなかった限り、政府を形成するように拒否する。六月四日、ルブランが、公式に、ブルムに彼の政府を形成するように責任を負わせる時、国は、ストによって麻痺される。困難な諸条件の中で、人民戦線の経験は、始まる。

人民戦線の素晴らしい日々、三六年夏　三六年夏は、たとえある数の措置が、政府の最初の数週間の間に提起された、基礎的延期のように思われるとしても、人民戦線の仕事の要点を完全に実現させるように見える。人々は、ある人々が、別の人々は、進行中の革命の恐れを識別する間に、新しい時代の初めを敬意を表して、実現の相対的謙虚と衝撃の間に、隔たりによって驚かされ得る。三六年六月四日、構成された内閣は、誰でも怖がらせる性質のものではない。世論の一部の恐れを和らげて、共産党員たちは、彼らの参加するように拒否を知らせる。経験を成功するように見えるように、彼らの欲望を確認しながら、彼らは、彼らが、よりよく、人民の主義主張を仕えるように、確認する。この障害が、取り除か

れて、政府は、社会党員たちに対して及び急進党員たちに対して、等しい役割を作る。もしブルムが、首相であるならば、ダラディエは、二番目の内閣の指導的地位である。三人の国務大臣は、次いでやって来る、急進党員ショータン、共和社会党員ヴィオレット、及び社会党書記長、フォール。経済的及び社会的諸関係は、社会党員たちに戻る。オーリオールは、大蔵省に、スピナースは、国民経済省に、ブドゥースは、公共土木省に、ボネは、農業省に、ルバは、労働省に、及びセリエは、厚生省に属するものである。急進党員たちは、社会党員サラングロに預けられた、内務省を除いて、重要な伝統的諸閣僚を保有する。国防省を加えて、彼らは、外務省（デルボス）、司法省（リュカール）、国民教育省（ゼイ）及び海軍（ガスニィエ―デュパルク）と航空（コット）大臣の負担である。結局、諸事件の圧力に従わせられた、及び緊急の中で行動するように強制された、伝統的構成に対して、多数の閣僚。

経済的及び社会的政策、マティニョン協定及び社会法　経済的及び社会的措置は、同時に、経済情勢の不可避性に及び経済恐慌の解決法の優位性に答える。

• 社会的危機への解決法。辛うじて、彼の政府が、形成された、ブルムは、国政選挙と内閣の形成の間に発展した、工場占拠でストの波から生まれた、彼を状況への解決法を見付けるように求めるため、急を要する働き掛けを増加するように見える。共和国大統領は、彼を、秩序及び合法性を再建するように求める。参事院の彼の旧同僚、ランベール―リボは、彼を、進行中の社会的紛争に対して、彼の調停を提案するように求める。労働総同盟は、首相が、労組が、抑え付けないし、抑止的措置を避ける、ストに対する出口を見付けるように、望む。もし緊急が、制御するならば、ブルムは、長い間、彼が、経済恐慌を終わらせるために強く勧める、経済的及び社会的政策を明確にした。三三年以来、彼は、ローズヴェルトの政策の方向性の中で、『リフレーション』、すなわち、購買力の、経済的流通を推進するように、彼らの収入の増加を使う、無一文された者たちへの好みの注入を提案する。失業の傷口については、彼は、賃金の値下げなしに、サラリーマンたちの労働時間の短縮によって、傷口を解決するように提案する。それは、企業のリーダーたちを、彼らの生産の維持

するため、新しい労働者たちを雇うのに導くはずであった。人民戦線綱領は、経済恐慌の社会的解決法の企てを構成する、これらの色々な措置を制止した。

• マティニョン協定の署名。三六年六月五日から、ブルムは、マティニョン邸で、経営者、フランス生産全国同盟の代表者たちと労働総同盟を集めるし、彼らに、長い討議の時間の後、三六年六月七日から八日までの夜の中で、署名される、協定の計画を提案する。『マティニョン協定』は、恐慌の社会的解決法を活用する。その協定は、賃金の七％から一五％までの値上げ、団体協約の署名、各企業の中で職員の代表たちの選挙を予知し、労働者たちに対して、労組の権利の行使を承認する。労働者たちは、工場占拠でストに終わらせるのに掛かり合いになる。数週間、政府、労働総同盟及び三六年六月一一日、集会の中で宣言する、『……満足が、手に入れられたから、ストを終わらせることはできる必要がある』、トレーズで結合された、圧力を必要がある。動きは、六月の第二の一五日と七月の最初の日々の間に、中断するため。マティニョン協定は、三六年夏の間、議会によって可決された二つの法によって、補充される。恐慌の結果に反対して闘争するように（失業）及び労働者たちの運命を改善するように、二重の対象のため持っている、諸法。一方では、フランスの社会史の中で、サラリーマンたちに二週間のヴァカンスを与える、有給休暇に関する法が、他方では、週毎に四〇時間以上にサラリーマンを働かせるように禁じる、四〇時間法、すなわち、五回で八時間が、問題である。労働者生活の諸条件の改善を加えて、政府の希望は、これらの法を、雇用の設立を引き起こすように見えることである。反恐慌闘争のこれらの社会的措置は、構造的諸改良のある数を伴っている。

構造的諸改良　人民連合綱領によって予知された、三つの改良は、三六年夏の間に取られる。

• 小麦の業種間共通の全国的公団。最初の改良は、三六年八月に、小麦の業種間共通の全国的公団の設立である。農民たちを考慮して、生産が、農民世界のほぼ全体性、すなわち、小麦を興味をそそる、同等のものを始めるのに、労働者世界のために、マティニョン協定は、存在した問題と同等のものをするような措置を採択することが、問題である。農民た

ちの、消費者たちの、製粉業者の及び国家の代表者たちによって管理された、その全国的公団は、毎年、小麦の値段を固定するはずである。諸県の中で、その公団は、毎年、公団によって固定された値段に対して、小麦を買うように、及び小麦を商品化するように、あるいは市場の正式化するため小麦をストックするように、保持された、協同組合を創設するはずである。不安なしで、公式の機関を、農業経済の中で介入するように見えない、及びこの便法によって、農業の国営化政策が、創設するように酷く恐れる、この上院の控え目を打ち破るため、下院と上院の間に、優に七つの『往復すること』が必要である。彼らの選挙者たちによって警告された、農民たちは、不信で法を迎える。三六年のキャンペーンのため、小麦の一キンタルの値段の一四一フランで（三五年に八〇フランに対して）、決定は、先入観の大部分を一掃するであろう。

• フランス銀行の改良は、政府が、決定的な変更を期待する、第二の措置である。フランス銀行は、その代表者たちが、総会（二〇〇人の大株主たちが、投票する）及び摂政政治の会議を満たす、重大な利害の砦のように思われる。二五-二六年に、フランス銀行によって演じられた、左翼への敵意を含んだ政治的役割は、その結果、この改良は、人民戦線の内部に結び付けられた諸政党によって、要求される。大蔵大臣オーリオールによって集められた、委員会は、銀行の無条件の国有化を提案する。彼が、上院によってかかる改良を受け入れさせ得ないことは、意識のある、ブルムは、四万人の株の持参人たちの全体に対して、フランス銀行の総会に投票権を与える、法を可決させるのに満足して、この計画を放棄する。フランス銀行の政府は、変えられる。もし頭取と二人の副頭取が、留まるならば、理事会は、政府によって指定された代表者たちが、多数派である、二〇人のメンバーたちの総会によって取り替えられる。フランス銀行の『民主化』のように思い付かれた。この改良は、政府によって涵養された希望を失望させるであろう。最も大株主たちは、総会に出頭するし、フランス銀行は、重大な民間の諸事件の砦に留まるし、及びブルムが、設立するように希望した、この『仏国銀行』に留まらない。

• 第三の構造的改良、軍需産業の国有化は、フランス銀行の改良と同様に、経営者に対して危惧すべきであり、同様に、

それらの現実の結果として有効でないものである。三六年八月一一日、可決された、国有化は、重工業を国有化するように、政府に対して可能性を予知する。法を活用するように責任を負わせられた、ダラディエは、極端な内気さで、事を行う。彼は、彼が、国有化された企業の先頭に残る、彼らの所有者たちを賠償された、航空機の大部分、一〇の工場を国有化する。政治的諸理由のために活用された、そして、経済的戦略のあるいは装備の練られた計画の奉仕ではなく、軍需産業の国有化は、恐慌に引き続いて起こる投資の不足及び大部分の所有者たちの気の小さい性格が、困難な情勢に置かれた、企業の不振を増大させる。再軍備のフランスの努力は、結局、重要な時期に、軽視されたし、三九年以前ではない、実は、装備のフランスの産業の再組織は、生産が、フランスの軍隊を、ドイツの攻撃に抵抗する状態に置くため、余りにも遅く、その諸結果を生じるであろう。不均衡は、ブルム政府の構造的諸改良によって引き起された半狂乱と、その諸改良の現実の間に、著しいものである。諸改良の内気さは、人々が、小麦公団の前に、農業の国営化に及び公営化に抗議した、人々が、財政的あるいは工業的重大な独占的支配を規制するため、無駄な努力に直面して、民間の所有の詐取の恐れを揺り動かしたことは、正当化しない。ブルムの政策に対して、起こされた訴訟は、明白にイデオロギーの領域の所轄である。それは、彼の敵たちを安心させるのに精力の宝を使ったように、ブルムの特権である。敵たちは、ブルムを、敵たちに、三六年に人民戦線の選挙の勝利が、及び続いて起こった、ストの波が、引き起こした、恐れを許さない。左翼界の中で、幸福感を引き起こす、真の人民戦線の神秘学は、政府が、完全に実現するように時間を持った、謙虚な行為によってより多く統治者たちの精神と意図によって、説明される。

人民戦線の神秘学、新しい時代の初めか　・偉大な希望。人々は、人民戦線政府によって取られた最初の措置の前に、労働者世界の熱狂を説明される。権力が、措置を、富裕者たち、有力者たち、経営者たちの熱狂のように思われたのに、初めて、首相は、労働者の条件を改善するように心配しているように確認された。三六年五月-六月のストの波は、警察の抑止に通じなかったばかりではなく、フランスの社会史とサラリーマンたちに対して重要な権利の授与の中で、賃金の

値上りは、波に続いて起こった。就労週日の削減、有給休暇の授与は、政府の意図の誠実さの同じ位の証拠のように見えた。三六年夏のこの初めで、労働者世界のために新しい時代の始まりを作った、別の措置は、現れ始めた。これらの物質的改善が、結局、人間の条件の真の哲学の、諸問題を取り組むように、導いた、人間主義の、人間解放に、人間の肉体的及び文化的富裕化に繰り広げる、寛容な考え方の枠内で、含まれただけに。何も、政策が、ラグランジュとヴィエノによって、第二義的なものとして考えられた領域の中で、政策が、導くように、人民戦線の神秘学を説明する、この新しい態度を特徴づけない。ラグランジュは、余暇及びスポーツの組織局に、副閣外相、すなわち、当時の心性は、政府が、これらのテーマを仕事をする必要であるように思い付かないで、その設立が、一般的な不信を引き起こした、省である（右翼は、『怠惰の大臣』とあだ名を付けて）。この閣僚の設立の下部組織である、考えは、新しい法、自己を教養を高めるように機会の事実から当然、彼らの時間の自由な、サラリーマンたちに対して、提供するように不可避性である。ラグランジュの仕事は、それでも未来で著しい。彼は、よりよい計算で田舎へ及び海へ赴くように、彼らの二週間のヴァカンスの恩恵を浴する、労働者たちに認める、割引した料金で、有給休暇の手形の原因となる。彼は、労働者のヴァカンスの組織、『ユースホステル』のお陰で、三六年夏の間に、著しい増大を知っている、組織の発展を奨励する。裕福でない若い労働者たちは、共同生活の習慣を付けながら、保養の場所について余りの費用なしで滞在できるように。同じ精神の中で、彼は、『赤いタカ派の人々』の結社、若い社会党員たちの習慣で、真のスカウト運動に対して、彼の支えを与える。人民戦線の指導者たちは、民衆的文化の発展に対して、あらゆる彼らの注意をもたらす。ゼイは、一三歳の代りに一四歳で、就学の義務の制限をもたらす。激励は、人民に対して、文化の道を開くように要求する、あらゆる独創的な作家たちに対してもたらされる。人々は、結社が、『民衆の』性格の色々な芸術の催しを興味をそそって、民衆的劇場のグループを増やすように見える。この運動の頂点は、三六年七月に、アルハンブラ宮殿は、ロランの作品、七月一四日を与える時、及び熱狂した群集は、観客たちによって歌われたラ＝マルセイエーズの調べで終わる、興行に対して、出席するように来る時、位置づ

けられる。余暇に、健康に、子供に、文化にもたらされた、この注意は、三六年夏の幸福感を生じさせる、この人民戦線の精神の特徴的マークである。労働者たちが、ヴァカンスに出発するのに、経済恐慌から生まれた陰気さと対照を成す、楽天主義の雰囲気は、国を勝ち取る。この新しい雰囲気に対して、三六年夏の素晴らしい数日を思い起こす、ブルムは、参照する。神秘学、新しい精神、開始……。理想は、植民地の中で、自由な政策の軽い気持が、説明するように現実に衝突する。

• 植民地政策の限度。植民地の中で、インドシナに、モロッコで、テュニジアに、及びフランスで国際連盟によって預けられた委任統治の中で、民族主義運動の発展に立ち向かった、人民戦線政府は、真に植民地政策ではない。どのように、急進党員たちと共産党員たちの間に、共通の態度を解放するのか。諸構造に攻撃されることなしで、及びフランスの主権の問題を提起することなしで、ブルム内閣は、最も明白な濫用に対して終止符を打つのに当てられる諸改良を事を行うように、及びフランスの植民地管理の植民地支配を受ける人々と議論するように、努力することを願う。それは、社会党の植民地大臣、ムーテの仕事、及び保護領と委任統治と交渉を引き受ける、外務省に対して副閣外相、ヴィエノの仕事である。最も緊急な諸問題が、地中海世界の中で提起されて、ブルムは、Ch－A＝ジュリアン教授の主宰の下に、上級地中海委員会を作り出す。ヴィエノは、チュニジア指導者H＝ブールギバ　Habib Bourguiba と交渉を企てる。もし彼が、独立に対してチュニジアの漸進的歩みを目指して、ブールギバの提案を拒否するならば、ヴィエノは、彼の諸改良の示唆に対して、注意深い耳を貸す。彼は、モロッコで彼にフランスの保護領の目的で話したばかりである、A＝E＝ファシ Allal El Fassi によって導かれた、『モロッコ行動委員会』を断わる。保護領の維持について頑固な、ヴィエノは、委任統治の形態の下に、国際連盟によってフランスで預けられた、レヴァント地方（シリア及びレバノン）の国々に対して、大きな理解を証明する。三六年夏の間、これらの二つの委任統治の代表者たちと、開放的な討議は、フランスが、経済的利益と彼の文化的利益の維持を認めるように見られて、一一月に、これらの国に対して独立を与える、二つの条約の署名に辿

り着く。フランスの代議士たちは、ヴィエノの署名を批准する必要があったし、条約の署名によって、代議士たちの間にかき立てられた、感動は、その証拠には、政府が、三七年六月に、議会に対して、この批准を敢えて提案しなかったのであり、安易でない働きをもたらした。アルジェリアに、開始の政策。この日付で、アルジェリアに、独立が、問題ではない。三六年六月に、『アルジェリア＝イスラム教会議』は、イスラム教徒たちに対して、個人的地位を保留しながら、フランスで統合を要求する、綱領に合意する、色々な政治的分派を集める。会議参加者たちに幾つかの満足を与えるように決心された、ブルムは、計画が、イスラム教徒たちのある集団に対して、フランスの市民権の授与を予知して、国務大臣ヴィオレットと一緒に要点を絞る。旧士官たちと下士官たち、戦争の受勲者たち、大学の免許の保持者たち、商業の、農業の公式の代表者たち、等。二万人の選挙人たちにとって一代議士の割合で、議会に対して、アルジェリアを代表させることは、予測される。ブルム－ヴィオレット計画は、フランスの市民権を、アルジェリアのエリート、すなわち、二万－二万五、〇〇〇の人々に授与するのに辿り着く。それは、発展する計画、未来について開放的な門である。そして、計画は、イスラム教の大衆の中で溺れさせて見られるように酷く恐れる、アルジェリアのフランス人たちの激しい抗議を引き起こす。帝国の別の部分の中で、植民地政策の新しい面は、人目が引かない。強いられた労働の実践の濫用を制限する、社会的措置の採択によって、及び開放的な思想に対して、植民地総督たちの任命によってマークされた、諸改良の政策は、抑止の政策の代りになる。人民戦線の仕事は、三六年夏の間、それらの具体的結果によってよりもっとそれらの心理的結果によって、重要であるように思われる。それは、フランスに創設される、新しい精神、その色々な政治的、経済的、精神的、知的面の中で、フランスの危機の解決法の企て、数か月前に、フランスの危機の可能な出口をマークするように思われた、ファシズムと共産主義の間の選択肢で、自由主義的民主主義の構造の維持の枠内で、寛容な社会的実践によって、逃れるように可能性である。人民戦線が、国民的困難に対して、二五－二六年以来、手探りで探し求められた、この解決法、このフランス風のニュー＝ディールであったために、経験は、成功した、三六年夏を想い起こすため、ブルムが、話

した、『一時の晴れ間』は、長持ちをしたように、必要があった。そうではない。夏から、最初の雲は、現れるし、困難の積み重ねは、人民戦線を、秋から、失敗に向かって道程を辿らせる。(六)

六　人民戦線の失敗と第三共和制の苦悩（三六年秋―三九年秋）

フランスの危機の解決法の可能な企てとして、左翼の政治的諸勢力によって考察された、人民戦線は、三六年夏の間、これらの希望を実現するはずであるらしく思われる。経済的回復は、春の社会的措置を後を追う、労働者条件の改善は、労働者たちにあっては、幸福感の感情を引き起こす、文化的覚醒は、多数のフランス人たちに対して、二〇年代の末以来、国が熟知した、衰弱が、終了する、感情を与えて、経験を伴う。人民戦線の政治的敵たちは、事態の異なったヴィジョンを持つことは、真実である。彼らは、人民戦線の中で、危機の完成、避けられない、革命的世界の終末の初めのように見える。ある人々の一時の晴れ間と別の人々の激しい不安は、三六年夏の末に耐えない。秋から、ブルム経験から、ある人々が、希望した、この解決法ではなく、フランスの危機の重大化する要因、フランスを打撃を与える、頽廃の補充する証拠を作る、緊張と困難は、出現する。

ブルム経験の失敗（三六年秋―三七年六月）　四つの相次ぐ要因は、ブルム経験が、構成した、信頼と希望の資産の年の以内で、逃避を説明するため、結び付く。諸対立の暴力、極左の失望、経済的諸矛盾、中産諸階級の離脱。

暴力的な及び憎悪に燃えた諸対立　ブルム政府の政権への到着は、極右の新聞と世論の中で、真の憎悪の激発を引き起こす。これらの攻撃は、このイデオロギーの家族が、摂取する、暗い神話の中で、それらの根源を突き刺す、狂信的態度の所轄である。三六年六月から、ブルム内閣の形成を敬意を表する、反ユダヤ主義の爆発で同じことである。その形成は、イスラエルの告白の社会党員によって指導された、政府の構成の中で、糧を見付ける。六月五日、モーラスは、アクシオン＝フランセーズ紙の中で、書く。『ユダヤの内閣は、作られる。社会的問題について、フランス人たちの間に討論でもはやない。

ブルム内閣は、民族的問題を提起する。それは、民族主義諸政党と反民族主義諸政党の間に討論がある。』王統主義の新聞は、人民戦線の中で、仕事に対して、『ユダヤの陰謀』を告発するまで止めない。グランゴワール週刊紙が、それに、ブルムの後に駆け込んだ、『部族』のメンバーたちによって、国家の最も高級の公職の侵入を告発するのに専心する、論争者H＝ベロー Henri Béraud の話題は、もっと乱暴的である。かかる仄めかしは、極右の新聞の中で、人民戦線が、完如開始する、憎悪の面の一つである。極右は、ますますコットあるいはサラングロのようなある閣僚たちを容赦しない。アクシオン＝フランセーズ紙によって発せられた、非難は、サラングロに反対して広まる。極右は、サラングロに、一四－一八年の戦争の間に脱走したように、そして、軍事的情報の敵に提供するのに自分に与えるように、非難する。サラングロは、戦闘に対して殺された彼の同志たちの一人の死体を連れ戻すように試みるため、敵の路線の後ろに見出されるのに。軍法会議によって有罪のないように承認された、首相によって防衛された、議会の多数派によって支持された、サラングロは、それでも、すべてに対して及び反対して、極右が、粘り強さで、サラングロに反対して追及する、キャンペーンによって揺り動かされる。三六年一一月一七日、サラングロをすべての疑いについて汚名を雪いだ、議会の討論の四日後に、彼は、その生涯の日々を終わらせる。サラングロが、対象であった、名誉毀損のキャンペーンは、三六年一二月に、罰せられずに行使されるのを非難を妨げるのに当てられる、新聞について法案の困難な可決に理由を与える。サラングロ事件は、人民戦線の経験を伴う、憎悪の激発で証明する。極右の荒々しい反対に対して、反共主義の名で行使される、右翼の、もっと政治的な、反対は、付け加わる。その事件は、攻撃の中でもっと控え目である。

反共主義の波とファシズムの影　・『共産主義の陰謀』。人民戦線の政権への到着は、彼の議会の右派の敵たちにあっては、しかし中道派－左派界の中で、異常な急進化を引き起こす。三六年六月末から、右翼の新聞は、工場占拠で、ストの波が、援助して、新しい多数派の構成が、怖がらせる、すべての人々を浸透する、テーマを発展させる。ストの波は、ストの後ろに、共産党が、見出される、及び共産党が、政府の革命的氾濫を狙うように前進する。ケレンスキーと等しく、

ブルムの方程式は、フランスの状況の解釈の鍵として役立つ。諸事件の各読み方は、多数派のメンバー、共産党が、専心する、及び、権力の革命的獲得の党の企てが、発展させる、拠点作りを浮き彫りにする。スト中の工場の中で突発された、最小の偶発事は、新聞の大きな見出しを作る。再統一された労働総同盟の内部に、共産党が、作る、異常な進歩—旧統一労働総同盟の活動家たちの活力によって、誘惑された、その多数の新しい加入者たちは、彼らの指導者たちを支持し、彼らを大きな連盟と県同盟の管理を保証されるように認める—は、過程に対する例証として役立つ。三六年秋から、フィガロ紙からマタン紙まで、次いでル＝タン紙あるいはル＝ジュールナル＝デ＝デバ紙によって、極右と一致して、古典的右翼の新聞は、人民戦線の後ろに、共産主義革命が、前進するように主張する。共産党が、暴力、教唆、二〇年以来、共和的国家の不安定化の企てによって、手に入れ得なかった、問題、それは、共産党を、明白な善意、自由と共和国に有利な言説の多様化、明らさまの節度によって、設置するのに準備をする。自由主義者J＝バルドゥー Jacques Bardoux が、共産主義の陰謀の経済を告発する、多様な小冊子よりだけ多く特徴的な僅かなもの。（J＝J＝ベキェル、S＝ベルシタァン『フランスに反共主義史』パリ、八七年。）もし世論の大部分が、この言説に敏感であったことは、疑問の余地がないならば、共産党の力をはるかに誇張するし、その目標が、変化しなかったように想定する、この人工的な劇化は、道具の性格を持つことは、確実になる。二六年、三四年に同様に、投票所への勝利を得た左翼が、権力の試練の前に分裂するし、政府に対して、普通選挙の敗者たちを連れ戻すことを、希望できる、右翼に対して、多様派の極端な翼を浮き彫りにすること、それは、世論の大部分の眼で、政府の全体性を信用を失わせることである。状況の自発的な急進化は、フランス人たちのいら立ちを引き起こし、街頭の中で、極端な諸グループを速める。人民戦線に対して、右翼の反対へのモーターとして役立つ、組織的な反共主義は、その主唱者たちに反対して、振り返るように危険を冒す、危険のゲームを確認される。

• カグール団。人民戦線の勝利の前に、アクシオン＝フランセーズの旧メンバー、E＝ドゥロンクルは、世論が、カグール団を作る、革命的行動秘密委員会を創設する。委員会の目的、制度を転覆するため、陰謀を組織すること、及び軍隊の

中でその共謀のお陰で、軍人を政権にもたらすこと。逃げ出す、ペタンの代りに、カグール団は、古い元帥F＝デスプレェイ Franchet d'Esperey と連絡を取る。人民戦線の勝利は、状況が、成熟する、及び行動への移るのが、時間である、ドゥロンクルを納得させる。軍事的一揆を正当化した、共産主義の陰謀に信じさせるため、カグール団は、三七年に、フランス経営者全国同盟の本拠と全産業に及ぶ経営者同盟に反対して、テロ行為を準備する。サラングロの後継者、内務大臣ドルモワは、三七年一一月に陰謀を解体するし、その主唱者たちを逮捕させる。

• 新しい右翼か。革命的危険に対して耐えるように不可避性の名において、諸政党の存在を正当化する、新しい右翼諸政党の誕生は、反共主義の波の結果をもっと意義深い。共産主義に対して、有効な柵を対立させることができない、時代遅れの機関のように、古典的右翼の古い幹部たちの諸政党を考慮して、諸政党は、広い民衆的動員を当てにする、民族主義的及び急進的諸スローガンの周りに集まる、そして社会的言説によって、大衆を誘惑するように願う。諸団体が、三六年六月に解散された、ドゥ＝ラ＝ロック大佐は、彼の火の十字架団を、フランス社会党に変える。強権的及び社会的共和国への熱望を表す、テーマを周りに、彼は、三六年と四〇年の間に、六〇万と八〇万の加入者たちの間に集める。ポピュリストの及び民族的な、フランス社会党は、反共和的よりもっと反議会主義的であるし、三〇年代の中でよく起こる、行動主義とファシズムの間に、混乱は、その社会党を、ムッソリーニの組織のライバルの家族の中で、分類させ得た。三六年に、ドリオによって、フランス人民党の創設は、党の組織、党のテーマ、党の計画、更にはイタリア＝ファシズムと党の関係によって、最初のフランスのファシスト政党の誕生をマークする。反共主義は、ファシストの方法あるいは思想の影が、くっきり浮かぶ、新しい右翼の誕生へのモーターとして役立つ。

• 潜在的な内戦か。この急進化は、言説あるいは組織のレヴェルの中で、留まらない。口頭の暴力は、肉体的な暴力を引き起こす。ファシズムと共産主義は、著しい力の二つの流れ、すなわち、反ファシズムと反共主義で作り出す。フランスに、ある人々に対して、ファシズムが、他の人々に対して、共産主義が、勝利するように妨げるために、二つの陣営は、

ためらわず遂に直接な対立に至る。三七年三月に、クリシィで。左翼によってファシストと見做された、フランス社会党の集会の開催を妨げるために、左翼は、デモを組織する。警察は、集会の自由を保証するために介入し、激しくデモ参加者たちに衝突する。発砲は、発射される。人々は、五名の死者たちと二〇〇名の負傷者たちを見付ける。それは、三六―三七年のフランスが、よく知っている、潜在的な内戦の雰囲気である。対立された陣営の各自のいら立ち、言語の暴力、くすぶっている、憎悪は、政治的討論の性格を変えた。敵である、人を、すべて犠牲を払って、除名するように、意図は、民主主義に政治的生活の性格を作る、討論の、思想の対立の代りになる。人民戦線政府は、この憎悪の雰囲気によって脅かされない。雰囲気は、結局、うんざりさせられたし、世論の大部分は、雰囲気に、この悪化を負わせるし、雰囲気の消去を経験した、鎮静を望む。その政府が、左翼の世論の中で恩恵を浴し得た、支持は、積み重なる、失望の前に衰退するように傾向があると同様で、明白な衰弱の要因が、問題である。

左翼の失望　政府の支持者たちの陣営の中で、ブルム政府は、政府の対内と対外政策を切望している、困難を遭遇する。

• 対内政策のレヴェルについて、ブルムは、彼の政府が、示す、節度によって失望された、彼の多数派の革命的翼を対立して見出される。三六年六月から、工場占拠で、ストの波は、状況が、革命的であり、ブルジョワ社会を倒すため、及び社会党が、あらゆる党の会議の中で党の誓いを訴える、この社会主義を確立するため、首相の決定された行動で足りた、新しい多数派の一部分を納得させる。それは、『革命的左派』のリーダー、社会党の分派の一つ、ピヴェールが、『すべては可能である』という、表現する、問題である。二言三言で、彼は、ブルムに対して、彼が、実践するのに準備をする、権力の合法的行使を、革命的獲得に変えるように要求する。人々は、どのように、五月三一日、ブルムは、彼が、人民から受け取った、委任で、彼の分析によって、合致した経験の性格を定義しながら、この提案に対して、拒否を対立させるかということは、知っている。この極端な法律尊重主義は、失われた機会の感情を持つ、社会党の左翼をいら立たせる。その左翼は、首相に対して、革命的政党のリーダーの彼の使命を満たさないように非難する（オードリィ、レオン＝ブルム

あるいは正義の政治家）。人民戦線の『革命家たち』は、ブルジョワジーを手加減するし、労働者階級に対して、給金を与える、政策の引き延ばしを告発し続ける。三六年秋から、ブルムによって続けられた、経済的政策は、革命家たちの最も激しい批判の対象である。彼らは、ブルジョワ社会の原則に対して、攻撃された、『戦闘用の人民戦線』を要請する。社会党の左翼は、社会党員たちの大部分が、ブルムの後ろに団結して、相対的に孤立される。三七年に、社会党は、『革命的左派』の解散を決定するし、三八年に、ピヴェールと彼の友人たちは、社会党から除名される。共産党は、ブルムの経済的及び社会的政策を批判しながら、中産階級を怖がらせるのを恐れて、革命的意味の中で、すべての手直しを強く勧めるように用心するように注目するのが、相応しい。

• 対外政策に関して、ブルムの考え方は、左翼の陣営の中で、もっと宣言された留保を引き起こす。人民戦線綱領自体は、曖昧であった。政府の内部に結び付けられた、左翼の政治的諸勢力は、自分が平和主義的であると表明する。三六年一月に、採択された綱領は、自分がはっきりと反ファシズムであることを願う。人民戦線のメンバーたちの大部分のため、これらの二つの言い回しの間に二律背反ではない、対内政策の行動を吹き込む前に、反ファシズムがある。政権の座に到達して、ブルムは、二つの軸に基礎を置く、対外政策を定義した。ファシスト諸独裁に直面して、平和と確かさの維持。ブルムを紛争を避けるため、何も忘れないのに至らしめる、平和の維持。ブルムは、三六年九月に、ナチに対して、敵意を含んだ態度を望む、共産党員たちの大きな動揺で、パリで、ドイツ帝国経済相、シャハト博士を迎えるように受け入れる。ブルムは、諸ファシズムについてすべての親切を拒否するし、彼は、エチオピアの併合の後、ファシスト＝イタリアと関係を結び直すため、企てられた使命を終わらせる。それは、彼に、ある数の急進党員たちを、激しく非難する。フランスの防衛の諸問題を意識している、ブルムは、彼の党の平和主義的翼の大きな気詰りで、再軍備と諸同盟の強化を強調する。ブルムは、ダラディエを考慮して、ダラディエを、国防に割り当てられた予算の総額について、オーリオールに対立させる、討論をずばりと解決する。参謀部の指導者たちによって要求された、九〇億フランを不十分なものとして判断

して、ブルムとダラディエは、デフレの年月の間に蓄積された遅れを再び捉えるために、一四〇億フランの軍事的装備の計画を始めるように決定する。三二年に、エリオ政府への党の参加の条件として、軍事的費用の激減を要求した、党のリーダーからやって来た、そして社会党の内部に、不安を引き起こす性質の意外な政策。イギリスの同盟の強化の政策は、その同盟が、ヨーロッパに平和の支柱の一つのように思われる程度において、もっと少なく困難を引き起こす。左翼の思想に合致した、対外政策を定義するように、ブルムの意図にも拘らず、三六年七月に突如開始する、スペイン内戦は、人民戦線の対外政策の諸矛盾を激しくするし、人民戦線に左翼へある支えを譲渡するであろう。

スペインの戦争　三六年七月一八日、フランコ将軍によって指揮された、イタリアの船と飛行機によって運ばれた、スペインのモロッコの軍は、共和国の政府に反対して蜂起するし、蜂起が、突如開始した、イベリア半島の北西部の中で上陸する。スペインの合法的政府の要求に対して、ブルム政府は、共和国に対して、武装と機器に、特に飛行機に援助をもたらすように企てる。不しつけが、この事実を明らかにしたし、右翼の新聞は、政府に、スペインの左翼の側で、フランスの戦争に開始を思いを懲らすように非難して、政府に反対して、激怒する。彼らの大臣のある数を、特に、彼らの党の多数派の意見を表して、スペインに、すべての干渉に決心をさせた彼らの敵意を知らせる、デルボスとバスティドのように、急進党員たちを奪う、不安は、ブルムのためにもっと気懸りである。ロンドンで、ブルムとデルボスの旅行は、首相を、紛争の中で中立の態度を保持するように、イギリス人たちの意図で納得させる。これらの最後のイギリス人たちは、スペイン事件が、フランスとイタリア及びドイツのファシスト制度の間の戦争に導いた場合に、旅行が、イギリスの援助に当てにできない、二人のフランス人たちを保証する。これらの多様な圧力の下に、ブルムは、彼の態度を再検討するはずである。彼は、ヨーロッパ強国に対して、フランスが、その役割のため、スペイン共和国への武器のすべての引き渡しを止めて、八月に署名される、スペインに不干渉協定を提案する。フランスと大英帝国によって尊重された、しかしファシスト諸国家によって尊重されなかった、この協定に反対して、左翼の大部分は、激怒する。人民戦線の反ファシズムの

契約が、断ち切られたように考察する、共産党員たちは、反対で逆上するし、『スペインのために大砲を、飛行機を！』という、テーマについて、キャンペーンを行う。彼らは、共和的スペインに対して、援助を要求して、集会を組織する。彼らは、三六年一二月に、政府の対外政策について信任票の中で、棄権するまで進行する。彼らは、社会党の内部で、ピヴェールと彼の『革命的左派』によって、激しく首相の政策を批判する。ジロムスキーと『社会党戦い派』の分派によって、話を理解される。彼らは、権威あるロンゲが、画かれる、スペインに対して、社会党行動委員会を活気づける。労働総同盟に対して、統一された旧サンディカリストたちと協力して、ジュオーは、コットと同様に、共和的スペインに対して援助を要求する。スペイン戦争は、政府が、支持する、左翼の多数派の内部に、明白な亀裂を引き起こす。もし内閣が、弱められるならば、内閣は、政府の政策を異議を申し立てる、左翼人たちの誓いが、誓いをひっくり返すことではなく、政府の政策を方向を変えるのに、誓いを強制するため、人民戦線綱領に基づくことであり、崩壊を避ける。政府の経済的失敗は、決定的になる。

経済的失敗　・自由主義の尊重。ブルムは、反恐慌闘争で、彼の二重の経済的及び社会的面の下に、優先権を作った。彼は、一方では、リフレーションによって推進の政策を、他方では、サラリーマンたちの労働時間の減少によって反失業闘争の政策を実践した。目標は、同時に、不振の中でフランスを維持した、デフレを、そして、サラリーマンたち及び定収入の所有者たちの利害を損害を与えて、不正な操作のために保持された平価切り下げを避けることであった。肝心なことは、政府が、打撃を与えることは要求しなかった、自由主義の枠内で、行われるはずであった。それは、資産の持参人たちの信頼が、金融に関するメカニズムの中で基本的な役割を演じるように、受け入れることであった。政府の政策、賃金の値上げ、四〇時間法の出資あるいは有給休暇法は、経営者たちの利害を損害を与えられた。どのように、人民戦線は、金融界の支持に当てにすることはできたのか。一つの矛盾は、ブルム政府の経済的政策をマークする、及びその政策を失敗に導く、多様な行き詰りの一つである。新しい政権に対して、実業界の敵意は、三六年六月から、外国への資金の逃走

によって結着する、そしてそれは、彼の自由な約束に忠実な、ブルムが、為替相場の管理を創設することに同意しなかっただけ一層多く容易なやり方で。金の出口は、速くなる。短期国債への及び三六年夏の間に乗り出した借金への応募が、予知されたことよりもっと少なくもたらすのに、フランス銀行の金保有高は、三六年九月に、五〇〇億フランで落ちる。実業界の政治的敵意が、人民戦線の失敗を報告するように、考察することは、一面しか見なかったであろう。資産の逃走は、生産の停滞及び物価の値上がりの状況に対して、すなわち、その邪悪な結果が、経済的状況の悪化を引き起こした、まずく抑え付けられた措置の結果に対して、経済的返答である。

• 邪悪な結果に対する経済的措置。ブルムの精神の中で、三六年六月に、実践された賃金の値上がりの政策は、経済的推進、生産の回復を引き起こし、急速な均衡に、物価と賃金を引き戻すはずであった。もし人々が、三六年夏の間に、生産の激しい増加を注目するならば、秋から、生産は、再び停滞する。経営者たちは、物価に賃金の値上がりを跳ね返らせた。分配された購買力の増加は、インフレによって吸収された。三七年の初めから、生産は、四〇時間法の組織的な適用に帰すべき新しい下落を知っている。ブルムは、生産の能力を減らしながら、サラリーマンたちの労働の週時間割の減少が、表れた、危険を意識していた、しかし彼は、新しい労働者たちの職と、同じ機械について八時間を相次いだ、グループの構成が、この労働力の欠如を覆い隠すように来たように、考えた。この解決法は、同時に、政府の分析の誤りによって、及びフランスの産業装備の老朽によって、実行不可能であることが明らかになる。ブルムの推理は、企業が、熟練労働者たちを、技術者たちを、更には管理職たちを必要としたのに、もし失業者たちが、資格なしで労働者たちでなかったならば、正確を得たであろう。互いに入れ替わりが、不可能であり、法は、失業の解消であった、法の主な目的を欠いているし、欠くべからざる職員の週毎に数時間を奪われた、企業は、企業の生産を減ずるのを余儀なくさせる。機械の利用の時間の数を増加するのにつれて、危機が、余りに老朽化した機械にした、無関心によって、表現された事実から当然、それは、考慮に入れないことであった。四〇時間法は、生産の下落を引き起こす。生産は、入手できる購買力の増加に付

加されて、インフレを推進するし、貨幣の前に逃走を速める。三六年三月に、サロー政府によって、兵役の期間の二年で定着、及び消費の財産の供給のため、普通に働く、ある数の企業の軍需製造の方に引き替えを引き起こす、再軍備の努力は、供給を減らし、インフレの圧力を増加することを付け加えることは、相応しい。おびただしい物価の値上がり、秋から貨幣について緊張及び三六年夏の再開の後、生産の停滞、次いで下落は、経済的政策の失敗を表す。右翼で及び実業界の中で、政府の経済的失敗によって、弱められた政府で結着を付けるように反応より別の反応で起こさせることなしで、人民戦線の経験の支持者たちの苦さを引き起こす、政府を退職して、戦闘は、始まる。

平価切り下げから休止まで　・強制された平価切り下げ。三六年六月六日、議会の演壇で、ブルムは、人民戦線のスローガンの一つを確認して、宣言した。『国は、われわれを期待する必要はない、われわれが、ある朝、平価切り下げの白いポスター、貨幣のクーデタのポスターの壁を覆う、われわれを酷く恐れる必要はない。』数日後に、オーリオールは、同じ精神の中で、人々の策略によって、危険に貨幣をさらした、人々に対して話し掛けた。『彼らの固有の利害の中で、金と外貨の保持者たちは、保持者たちを売るはずである。その理由は、平価切り下げの危険は、排除される。』三六年九月から、貨幣について緊張は、政府が、保護の措置へ追い詰められるようなものである。資産の逃走は、フランス銀行への金の損失を引き起こす。貨幣の金属製の保証金は、五〇％で外には保証されない。短期国債への募集の平凡さは、金融界の意のままに権力を置いた、二五－二六年の危機に似通った、財政の危機を恐れさせる。推進が、割り引かれた結果を引き起こすように期待しながら、必要な猶予期間を手に入れるため、夏の回復の後、鎮まる、経済への鞭の強権発動を再び与えるため、ブルムとオーリオールは、平価を切り下げるのを余儀なくさせる。大英帝国と合衆国と交渉の後、彼らは、議会に対して、『外貨の調整』を提案する。金の六五、五ミリグラムの値打ちがあった、ポワンカレ＝フランの、純金の重さの二つの限界、四二と四九ミリグラムによって定義された、オーリオール＝フランは代りになる。フランの平価切り下げは、二五％と三五％の間に位置づけられる。右翼に同様に左翼に酷く迎えられた、平価切り下げは、何も解かない。平価切り下げは、フランスの物価と外国の物

価の間の隔たりを再び捉える力のないものである。平価切り下げは、三七年の初めから、下落する、生産の短い再開を引き起こす。

• 社会的領域の中で『休止』。ブルムは、もし彼が、実業界の信頼を再びもたらすように願うならば、新しい政策を定義するように強制される。社会的措置が、彼に、これらの界を譲渡した、及び作られた不安全の雰囲気が、貨幣の安定を害する、財政の何時までも続く困惑の不安な、資産の逃走を引き起こす、事実から当然、意識のある、ブルムは、社会的領域の中で、休止を決定する。このブレーキの打撃は、公式の通知が、なされる前に、秋から感知できる。人々は、ストに対して、すべての訴えの前に、労働の紛争に関して、義務的仲裁を制定して、法案の寄託で、最初の証言を持っている。新しい政策は、社会党の首相が、経済的自由主義を保護したように自慢する、サン＝シィルヴェストル Saint-Sylvestre の演説の中で、透けて見える。新しい政策は、リヨンで、首相の旅行の時、三七年一月に、不公式に知らせられる。三七年二月に、ラジオ放送された演説の中で、ブルムは、公然と『休止』を知らせる。『休止の時間は、必要である……。民間の経済は、なお弱い恢復期の状態の中で、見出される。その理由は、新為替レートの調整で、僅かの月に紹介された、大きな社会的諸改良の偶然の一致は、均衡が、なお強固にされない、すべての新しい諸条件の中で、偶然の一致を置いた。』休止、それは、予測された改良の幾つかの計画に対して、断念である。物価について賃金のスライド、老人労働者たちのために退職年金。それは、中道派と右派の政治的諸勢力によって要求された、予算の正統への復帰である。ある主導権は、新しい政治的路線を確認する。三七年三月に、人々は、四人の専門家たちの委員会が、為替相場の市場を監督することを、及び政府を勧めることを委任されたことを、知る。委員会は、フランス銀行総裁、ラベイリー Labeyrie、と右翼及び実業界の近い三人の人たち、Ch＝リスト、P＝ボードゥアン、J＝リュエフを含む。政府は、議会に対して、新しい貸付けを要求しないように、大土木工事の政府の綱領を減らすように、及び借金の古典的な解決法に訴えながら、国防の費用を満たすように認める。『ル＝タン』紙とレイノーは、この決定的な転換点に対して、拍手喝采する。休止は、隠健界を満足する。失望は、多数派の

中で著しい。ピヴェールは、首相の任期に対して、彼の大臣秘書官の辞職を与える。共産党は、ブルムを、『トラストの前に降伏』したように非難する。失望は、労働総同盟に対してより小さくない。実業界の中で、人々は、好意的な政府を見ない。ブルムの後退は、彼の弱さを明らかにした。人々は、彼の崩壊を引き起こすように、政治的手段を探し求める。中産諸階級の発展は、経験を終わらせるように認める、梃子を提供するであろう。

中産諸階級の逆転　もし人民戦線が、三六年四月―五月の国政選挙に対して打ち勝ったならば、それは、中産諸階級の票のお陰である。急進党によって誘い込まされた、あるいは購買力の推進の政策によって、恐慌を終わらせるように社会党員たちの約束によって誘惑された、中産諸階級は、社会党員たちについて、左翼連合の立候補者たちについて彼らの票をもたらした。ブルムによって前面に押し出された恐慌の解決法は、労働者階級の利害を考慮に入れる。正統なマルクス主義の信奉者、ブルムは、急速なプロレタリア化に対して、経済的発展と資本主義的集中によって約束された、中産諸階級を、小ブルジョワジーの残りのグループとして考察する。彼が、生存を延期することは要求しない、紛失の途中に、彼は、階級に対して提案するのに無一物である。ブルムは、社会党員たちに対して、中産諸階級に対して、資本主義の犠牲者たちの防衛を広げるように要求した、デアと『新社会党員たち』を攻撃しただけ一層多く、彼の諸問題に縁のないものである。この暗示は、彼に原理的な異端的な思想のように見えた。三〇年代のフランスの中で、社会的な同様に基本的な現実の怠慢は、人民戦線の失敗の原因となるであろう。

・共産党の危険の恐れ。政権の座に就いて、左翼の急所、中産諸階級は、三六年夏から、苦みと失望をよく知っている。中産諸階級は、彼らが、執着される、所有権を再疑問視するように思われる、六月の占拠でストで不安である、そして中産諸階級は、政府が、ストに巧く処理しないことに、驚く。三八年まで、這うストは、三六年六月の革命的な波の恐れ、及び暴力によって財産接収の恐れを再び立ち現れさせるであろう。何で、三六年の夏と秋から、社共両党の左翼によって導かれた、スペインに干渉を考慮して、キャンペーンの後に、新しいヨーロッパの紛争の恐れは、付け加わる。中産階級

は、その階級に、人民戦線に敵対する、右派と中道派の新聞を提案する、諸事件の読み方に応ずる用意ができている。占拠でストは、党の革命的計画を維持する、共産党の事実である。共産党員たちは、ソヴィエト＝ロシアの最も大きな利益のために、フランスが、勝ち得ない、紛争にフランスを導こうと努力する。その理由は、同じ時期に、ストは、フランスの再軍備の努力を妨げるし、扇動を支配させる。一度国が、敗北されて、共産党員たちは、かつてロシアにレーニンのように、革命を突如開始するであろう。

• 政府の政策の批判。中産諸階級のこの反共主義に対して、政府の社会的政策の結果に関係する、不安は、付け加わるであろう。六月の賃金の値上がり、四〇時間法、有給休暇法は、諸企業の生産のコストを重くする。もしマティニョン協定を交渉した、大経営者が、これらの補充の責任を支えることのできる状態にあるならば、経済恐慌によって揺るがされた、及び人民戦線政策が、その地位の新しい悪化によって結着するため、小経営者も同様ではない。独立した中産諸階級は、これらの措置に反発し、大経営者たちによって保持された、フランス生産全国同盟の指導部の政策に抗議し、及び政府を圧するために『経済的救済諸委員会』に対して加入する。事件は、経営者の組織の内部の危機を引き起こす。その諸構造は、小経営者のもっと重要な代表制を許すため、変更される。その議長デュシュマンは、辞職し、Cl＝J＝ジィニューは、議長を取って代り、及びその略号（CGPF）を維持しながら、その全国同盟は、フランス経営者全国同盟の新しい名を取る。下部組織で、経営者の組織のこの反乱は、小経営者のいら立ちの面の一つである。反対のテーゼに対して、獲得される、この社会的集団の政治的急進化は、もっと重要である。共産党が、ストあるいは好戦主義によって革命を準備する間に、政権の座にある社会党員たちは、社会保険科の企業負担分の下に押し潰された、小経営者たちの合法的財産接収によって、共産党を予測する。脅威は、より小さくないし、三六―三七年の多数の破産は、危険が、幻想を抱かせないことを証明するためである。小経営者のこれらの警報に対して、ポワンカレの安定化の後、新しい削減、三六年九月の平価切り下げによって打撃を受けられた、金利生活者たちと固定した収入の保持者たちの怒りは、現実の収入が、デフレ政

策によって、恐慌の時期に、僅かに切断された、しかし購買力が、インフレと物価の値上げによって使い込まれる、官公吏たちの苦さは、付け加わる必要があったであろう。それは、人民戦線のイデオロギー的な魅力が、不満の表現をブレーキを掛ける、環境であるとは言え。色々なニュアンスで、それは、三六年秋から、人民戦線から遠避ける、中産諸階級界の大部分である。右派に及び中道派に対して、人民戦線の政治的敵たちは、確実な反対の発展への必要な補助を見付けるであろう。三七年の最初の数週間から、政権の座にある人民戦線の政策によって、あるいは二つのマルクス主義的政党の見解によって、紛失で脅かされた中産諸階級の名において、政府に反対する攻勢は、繰り広げられる。共和的諸価値のパレットの中で、この社会的グループが、演じる、役割を考慮に入れて、世論の中でもたらされる、攻勢。中産諸階級のこの離脱は、離脱が、急進党を、政府の多数派と向き合って、近づけないのに至らしめる程度において、重大な政治的な跳ね返りである。

急進党の離脱とブルムの崩壊　人民戦線の多数派のメンバー、急進党は、人民戦線を支える、議会の方式の要である。ダラディエは、政府の第二の人物である。党の代議士たちの最大部分は、党の選挙を、人民戦線の型の立候補取り下げに負うている。急進党は、党の内部に、左翼の多数派に対して、反対者たちの行動的グループを存在する、しかし、彼らの努力は、人民戦線のゲームをするように、ダラディエと代議士たちの多数派のはっきりした意図に衝突する。夏の末から、彼らの選挙区から帰った時、代議士たちは、国の状況と政府の政策の前に、深い下部組織の不満を考慮する。この警告に無関心であるため、余り彼の党の関心に対して、ダラディエは、中産諸階級に対して、もっと有利な方向の中で、政府の政策を方向を変えようと努力する。急進党員たちのこの不安に答えるため、及び彼の多数派を保存するため、ブルムは、休止を公式に知らせる前に、休止の政策を配置する。方向を変えられた人民戦線に忠実のままでいるように、ダラディエの意図は、手遅れでやって来る。動きは、突進させるし、大部分の加入者たちの不満に基づく、人民戦線への急進党の反対は、控え目の指導部を引き起こして、党の行動を発展させ得る。四月一九日、カルカリーヌで、次いで六月六日、サン＝

ゴーダンで、急進党の諸委員会と諸連盟が、人民戦線の行動の前に彼らの留保あるいは彼らの敵意を知らさせる間に、急進党青年同盟の行動主義的核によって組織された、大デモは、起こる。ダラディエは、彼の群集に向き合って、彼を不安定な立場に置くように危険を冒す、彼の管理の外に、動きを発展するままにさせ得ない。三七年三月に、彼は、中産諸階級の防衛の結社の創設を奨励する。彼は、予告、警告、更には内閣の政策の否認を繰り返す。六月六日、サン＝ゴーダンの集会で、彼は、秩序の回復と生産の推進の上に建てられた、政府の綱領に取り替えの綱領を呈示する。ダラディエは、政府の崩壊の場合に、スペアの解決法を構成する。政府の敵たちのため、サン＝ゴーダンの演説の意義は、明確である。瞬間は、ブルム政府から取り除くようにやって来た。オーリオールの財政的諸計画は、それらの機会を提供するだろう。六月一〇日、オーリオールは、『休止』が、無効であった、財政の危機が、脅かす、資産の逃走が、止めなかったことを確認して、議会に対して、政府に対して、三七年七月三一日まで、財政的全権を与える、法案を届け出る。政府が、これらの手段を用いて活用するように要求する、諸計画の正確な文面は、有名ではない、しかし、人々は、幾らかの課税の増加を加えて、政府が、資産の逃走を管理するのを考えることは、無視しない。『専門家たち』の辞職は、政府の諸計画が、財政的正統性を要求しないように、兆しである。議会は、政府に対して、政府が、要求する、全権を与える。カイヨーの扇動で、上院は、全権を拒否する。それは、党の下部組織の見解を表すのに、及び敢えて政府に反対しなかった、多数の彼らの同僚たち、代議士たちの秘密の誓いに答えるのに自信のある、急進党の上院議員たちの有効な三分の一が、ブルム経験を終わらせるため、彼らの票を、右派と中道派の票に付加されたことである。二度と繰り返して、上院は、財政的全権の計画を拒否する。六月二二日、ブルムは、彼が、欠くべからざる行動の諸手段を奪われることを考慮して、辞職する。

ブルム経験の総括　有給休暇法と週労働四〇時間法が、存在した、社会的征服の思い出は、ブルム政府によって導かれた人民戦線の経験で存続する。ブルム政府が、労働者階級にあっては、夏の瞬間を引き起こした、新しい時代に広大な希

望の思い出。資本主義体系の枠内で、社会的正義の可能性の言い回しで、ブルムは、有産者たちのエゴイズムに帰すべき失敗が、未来に対して、すべての改良主義的な経験、及び自由主義を非難したように暗に意味して、彼の経験の総括を建てるように要求した。『もしわれわれが、失敗したならば、人々は、合法的枠内で、諸政党の連合によって、民主主義的諸制度の助けで、この国の民衆に対して、進歩と正義の諸改革を手に入れさせることが、可能でないかどうか自問する義務を負わせたであろう。』ブルム経験は、フランスの危機に対して、解決法の企てであった、問題の失敗を説明する、別の諸現象を浮き彫りにする。最初の現象は、人民戦線の連合の目標の曖昧さを切望している。連合は、反ファシズム連合であるのか、この反ファシズムは、内部のレヴェルについて表現されるはずであるのか、あるいは反ファシズムは、ヨーロッパの受諾を見付け得るのか。反ファシズムについて合意して、人民戦線の三つの政党は、反ファシズムが、行使されるはずである、スペースについて、反ファシズムではない。連合は、経済恐慌に反対して闘争するのに当てられる連合であるのか。合意は、壊れ易い。合意は、この闘争の諸手段を定義するのが、問題であることは、消え失せる。共産党の治療薬の簡略主義（『金持ちを支払わせる』）に、急進党員たちが、中産階級の諸利害を心配するのに、社会党員たちは、労働者階級を優遇するように、彼らの意図を対決させる。別の矛盾、社会党を活気づける、矛盾。何は、社会党員たちの現実の目標であるのか。それは、ブルム政府を問題視するため、諸会議あるいは彼らの敵たちの中で、活動家たちは、目標を明示するのを愛するように、革命であるのか。それは、三七年初めから、政府が、追跡する、改良主義の道であるのか。演説と諸事実の間に、隔たりは、同時に、別の意見のフランス人たちにあっては、及び社会党の活動家たちにあっては、恐れを生じさせる。社会党は、恒久的ジレンマに直面させる。政権の座に参加しない条件で、社会党の結集力を維持すること、あるいは社会党が、責任ある地位を行使するのに至らせられる、危機と分裂を危険を冒すこと。これらの矛盾が、一つずつ突如起こる、経験の年月の後、人民戦線は、ある人たちが、希望した、フランスの危機のこの解決法ではなかったことは、明らかにする。三六年六月の多数派は、出席しているのに、何によって、人民戦線を取って代るのか。フランスは、失望させる過去への復帰

の中で、あるいは冒険の方へ跳躍の中で、解決法であるのか。これらの言い回しで、三七年六月から、ブルム経験の失敗の後、人民戦線の終わりは、提起される。

権力の麻痺及び世論の右翼への地滑り　三七年六月と三八年秋の間に、人々は、紛争の間にフランス人たちを対抗させる、紛争のいら立ちで同様に、人民戦線の多数派の崩壊を目撃する。国が、よく知っている、全体的危機は、重大化する。

ショータン政府あるいは退嬰主義の時期　（三七年六月―三八年三月）・推移の政府。プルムが、ひっくり返されて、人民戦線の多数派は、諸組織のレヴェルで、三五年に締結された同盟を具体化する、全国人民連合委員会は、現職であるように、議会であるべき場所に留まる。その結果、共和国大統領は、政府の先頭に、人民戦線のメンバーを、しかし、ブルムを上院に対抗させたばかりである、紛争を考慮に入れて、社会党員ではなく、呼ぶとは別の解決法で持たない。彼の選択は、人民戦線に有利な、しかしダラディエよりもっと人民戦線に積極的に関与しなかった、柔軟の及び和解の人、ショータンに向けられる。ショータン内閣は、内閣の設立から、推移の政府の様に見える。先ず最初に、内閣の構成によって。政府の指導部は、急進党員へ移る、しかし、モネ、ムーテとドルモワが、農業、植民地と内務各省を占めるのに、社会党員たちは、副総理大臣、ブルムで、そして国務大臣、フォールで、内閣に参加し続ける。財政の正統性の明白な支持者、急進党員ボネの大蔵省で、影響力は、雰囲気が、同じ雰囲気ではないことを、指摘する。推移の政府、ショータン内閣は、いずれは、内閣が、ダラディエへ戻る、内閣は、いかなる疑いを作らない、部署を占めるようなものである。内閣のリーダーの人物によって、推移の政府である。ショータン内閣は、もし内閣が、人民戦線の多数派に基づくならば、対立は、急進党諸大臣を慎重に準備するし、社会党員たちに彼らの攻撃を集中する、事実によって、推移の政府である。実現された均衡は、不安定である。どのように、政府に対して、社会党員たちの影響力で、ブルムの経済的思想に対して、彼の敵意を包み隠さない、ボネの政策と見解を合致させるのか。どのように、社会党の意図で、労働界の中で、秩序の急速な回復で、急進党員たちの、及び労組の行動を支えるように、共産党員たちの欲望を聞き届けるのか。社会不安の不変によっ

ていら立たせられた、ショータンが、共産党を問題視する時、矛盾は、三八年一月に、突如起こる。『彼は、一月一四日、宣言する、ある人たち、ある諸グループ、ある暗い諸勢力が、彼らの神秘的な及び強固な努力を続けるし、労働者階級に対して、暴力の諸方針を与えることは、可能になる。』彼が、政府を放棄したように非難する、政府に対して、人民戦線綱領から吹き込まれた、諸要求の広い政綱を呈示する、共産党員ラメットの激しい応答の前に、ショータンは、共産党の代表者に対して、『彼の自由を与え』ながら、危機を開始する。人民戦線の多数派の分裂のようにこの答えを解釈して、社会党は、党の大臣たちを取り下げる。危機は、ショータン新内閣の構成によって解決されるであろう。社会党員たちが、欠席して、政府の左翼は、社会主義共和同盟の代表者たち、独立社会党員たち、フロサールとラマディエによって、構成される。ショータン内閣のこのその場しのぎの処置は、右翼に新しい地滑りを表す。内閣に、議会が、五〇一対一票によって、与える、信任は、その最良の証拠になる。ショータン政府の推移の性格は、結局、その曖昧さと同時に強調された。その理由は、人々は、首相が、選ぶはずである、二つの可能な多数派を並ぶように見える。人民戦線の多数派と右翼に向けられた、集中の、更には国民連合の多数派。

• 政治的及び社会的退嬰主義。何の政策は、政治的動向が、定義するのに不可能であり、対立の信頼で恩恵を浴しながら、人民戦線に対して、忠実な理論中である、政府を追跡できるのか。政府のリーダーが、選択をするため、必要な権威を自由にしない程度において、リーダーは、行動なしで留まる、退嬰主義を選び出すとは別の手段で持たない。経済に関して退嬰主義。ショータンは、敢えて、上院の対立を恐れて、ブルムの軽い気持ちを取り戻さない、彼の好みとボネの好みを持つ、自由な諸方法に戻らない。彼は、部分的諸措置で回り道をする、時間で獲得するのに満足する。彼は、外国の為替相場の均衡を回復するため、高いままで、フランに対して、価値が下がり続けるように認めて、フランの金平価の少ない限界を廃止する。その結果、徹底的なやり方で、国庫の支出を減ずるように、ボネの意図にも拘らず、貨幣を脅かす、三七年一〇月に、重大な財政的危機になる。フランスの財政的状況は、ショータン諸内閣の下に重大化する。支払の均衡

は、三七年末、四〇億のポワンカレ＝フランの赤字に達する、金の外出は、この赤字を清算するにせよ、フランの下落への投機の理由でせよ、速める、そして、フランス銀行の金保有高は、危険に減らす。同時に、軍事的費用の増大と社会的騒乱の不変に帰すべき、公の収入の減少は、三七年に、二八〇億フランに達する、予算の赤字を掘り下げる。ボネは、人民戦線の多数派を衝突する、古典的な諸措置に訴える。厳格な貯金、課税と鉄道の料金の値上げ、等。退嬰主義は、社会に関しては同じ程度である。ショータンは、ブルム政府が、『休止』の時に眠らせて置いた、諸計画を取り戻すことを考えない。彼が、三七年八月に、『生産調査委員会』を設立するように決定する時、諸労組は、委員会に、人民戦線の諸措置の象徴的な四〇時間法に反対して脅威のように見える。彼は、政権から、社会的政策の最中の値引きを手に入れるように努力する、労働総同盟の圧力に衝突する。ストは、取り戻し、あるストは、明白な規模の大きさである。グッドリッチ工場のストは、労働者たちと遊撃隊員たちの間の衝突によって、結着する。三七年一二月二九日の公共企業体のストは、首都を麻痺し、次のジレンマの前に、政府を位置づける。ストの動きを鎮圧すること、及びストの多数派から左翼を離反させること、あるいはスト参加者たちと交渉すること、及び実業界の怒りを引き起こすこと。麻痺された、ショータンは、第三の道を選ぶ。ストの場合に、義務的調停について法を可決させること。それは、彼を、共産党に反対して、三八年一月の物音に押す、ストの頑強さによって、彼にあっては引き起こされたいら立ちである。経済的退嬰主義と社会的退嬰主義は、対内政策について結果である。ショータン政府は、政府の周りに集まる、二つの可能な多数派の間に選択しないながら、政府に反対してお互いに建てるように、逆説を成功する。政府が、人民戦線の多数派から生まれる以上、政府は、右翼の反対に衝突する。ドルモワが、三七年一一月に解体する、カグール団のテロ行為は、新内閣の最初の数か月の中で、生じる。内閣が、政治的転換点を知らせる程度において、三八年一月に形成された内閣は、議会の右翼の側のもっと大きな寛容で恩恵を浴することは、真実である。左翼に、ショータンの社会的退嬰主義、経済に関しては感じられた正統の収入は、人民戦線を生活に維持するような不安によって抑制された、諸批判を引き起こす。票の弱い幅で、社会党は、ビヴェー

ルとジロムスキーの関心が、党の内部に進行するのに、三八年一月に、ショータンを支持するように、ブルムとフォールの提案を受け入れる。共産党員たちについて、もし彼らが、三七―三八年の二つのショータン政府に対して、信任を可決するならば、それは、批判の意図で、社会的圧力によって方向を変えるように確かな意図も、ストに対する奨励も、政府の政策である。

• 対外政策に退嬰主義。政府は、対外と植民政策に関しては、主導権で選び取らないし、政府の無活動の諸結果は、重大である。植民地の領域の中で、ブルムの自由な軽い気持ちの最後の効果は、薄らぐ。アルジェリアあるいはフランス―レバノンとフランス―シリア条約のため、議会の批准に対して、ブルム―ヴィオレット計画を提案するため、何もなされない。抑止は、インドシナに取り戻し、モロッコで、ノゲース Nogués 総督は、騒乱の後で、民族主義のリーダーたちを強制収容所に送らせる。ヨーロッパに、状況は、もっと重大である。国際連盟は、幽霊の外には存在しない、ベルギーは、政府が、アルデンヌ山地をその先に、フランスの国境を覆う、マジノ線を延期する決定をするのを除いて、三七年四月に、自分が中立であると表明した。フランスの同盟を結んだ国、ソ連邦の軍隊が、参課部を打撃を与える、追放によって麻痺されるのに、ポーランド、ユーゴ、ルーマニアは、ドイツと接近を粗描する。もし人々は、合衆国が、三六年と三七年に、ヨーロッパ戦争の中で、引っ張るままにならないように合衆国の意図を証明する、二つの中立法を可決したことを加えるならば、人々は、国際的レヴェルについて、フランスの状況の不安定さを理解する。分裂の途中に多数派を強固にするよう心配された、ショータンは、諸同盟の崩壊を目撃して、及び国防に関して、彼の側で、参護本部のリーダー、ガムラン将軍をすべて信頼する、ダラディエにすべての自由を任せて、国の対外的状況を立て直すために何もしない。何も、ショータンの辞職の諸条件よりよく対外政策にこの退嬰主義を特徴づけない。三八年三月一一日、ヒトラーによってオーストリアの併合、合併に辿り着く、重大な国際的危機が、描かれるのに、それは、対内政策の事件、すなわち、議会が、可決するのに要請されたことなしに、三八年三月九日、ショータンの辞退を引き起こす、ショータンによって要求された財政全

権を可決するように社会党員たちの拒否である。ヒトラーの企ての発展に無関心な、ショータンは、完全な国際的危機の中で政府なしでフランスを任せる。

第二次ブルム内閣及び国民連合の企て（三八年三月一三日―四月一〇日）全権を可決するように社会党員たちの拒否が、政府の崩壊の原因であり、議会のゲームの規則は、拒否が、危機を解決するため、社会党員たちの党に訴えさせるように願う。政府を形成するために懇願された、ドイツの危険を意識のある、ブルムは、三六年六月に同様に人民戦線政府ではなくて、脅威に対処するため、『トレーズからレイノーまで』国民連合政府を提案する。もし彼が、この企ての中で、共産党の及び反対のメンバーたちのある数の支持を出合うならば、ブルムは、右翼に及びピヴェールと彼の友人たちが、計画に反対して動員を組織する、彼の固有な党の内部に、激しい反対に衝突する。右翼の反対を打ち破るため、ブルムは、三月一二日、合併の翌日、彼が、提案する、方式の合法性を弁護するため、反対の諸グループの前に、自己紹介しながら、何時もと異なる働き掛けを完全に実現する。人民戦線のリーダーに反対する憎悪、反ユダヤ主義、共産主義の恐れは、彼の提案が、考慮するように、最小のチャンスを持ったため、反対の陣営を浸透する。フランダンに従って、右翼の代議士たちは、国民連合の計画を拒否する。いずれにせよ、ブルムに対して、彼が、上院の敵意を、及び人民戦線の多数派でいない、及び時間が、政治的生活の右翼の方に軌道修正からやって来たことを証明するように、ルブラン大統領の意図を考慮に入れて、運命を知っていた、新しい人民戦線政府を構成することは、事実である。相続者の名前は、有名である、それは、三七年六月以来、彼の時間を期待する、及び集中の方式、穏和派で急進党員たちの団結で結び直す用意ができているように見える、ダラディエである。これらの条件の中で、第二次ブルム政府の歴史は、フランスが、不毛な議会的ゲームに、国のために貴重な時間を失うことは、確認する、左翼の人たちをいら立たせる程で、待ち望まれた崩壊の上演の歴史である。辛うじて形成された、三六年六月の政府に多数の点について似ている、政府は、議会の前に、三七年六月の要求と同様に、もっと正確な、財政全権の要求を届け出る。ケインズの展望の中で（その間に、ブルムは、ボリスの影響の下に、

イギリスの経済学者ケインズの一般理論を読んだ。）、信用に基づく軽いインフレによって、経済を推進することが、問題である。資産の逃走を避けながら、この可能な政策を返すため、計画は、為替相場の管理の制度を予知する。最後に、『金持ちを支払わせる』ため、証券取引の操作の管理の設立を計算なしで、一七％まで進み得る、資本について、課税は、設立される。この計画は、右翼に、無条件な挑発の効果を作る。フランダンによって導かれた右翼の抗議にも拘らず、議会で可決された、この計画は、カイヨーが、何回も、政府の政策の代理人をなされる、上院に対して拒否される。三八年四月七日、ブルムは、大統領に対して、彼の政府の辞職をもたらすであろう。人民戦線の抵当は、取り除けるように見える。ダラディエの時間は、鳴った。

ダラディエ政府及び人民戦線政策の再疑問視　三八年四月一〇日、首相で任命された、ダラディエは、ショータン政府の時期をマークした、曖昧さの中で、数か月の間、避難するであろう。彼の順番で、国民連合政府を提案した後、彼は、急進党員たちが、フロサールとラマディエの二人のメンバーによって、及び―新しい事実―三六年六月以来初めて、政権の座に戻る（法務省にレイノー、商業省にマンデル、植民地省にシャンプティエ＝ドゥ＝リーブ Champetier de Ribes）、穏和派によって、左翼に強化される、集中のグループを形成するであろう。人々は、人民戦線政府の面前でいるのか。四月一二日、信任を可決する、多数派の構成は、いかなる情報を与えない。その理由は、五七二対五票の代議士たちは、ダラディエを信頼する。ダラディエは、彼の多数派の選択を持っている、しかし、左翼諸党は、反対が、その投票によって、新しい多数派を探し求めるのに選択を奨励するのに、彼が、人民戦線に有利な選択を確認するように希望することは、明らかである。選択するように、首相で。ダラディエは、彼にありそうなように見える、戦争の危険によって、及び危機と市民の諸闘争が、弱くした、国を危険に経済的、精神的及び軍事的に準備するような不可避性によって、絶えず付きまとわれる。それは、ダラディエを、急進党員マルシャンドー、大蔵大臣と合意して、フランスの物価と外国の物価の間に不均衡を終わらせるため、充分なように見える、三八年五月五日、新しいフランの平価切り下げを決定するのに至らしめる、この選択で

ある。この措置と政府の内部に、穏和な大臣たちの影響力は、フランスの方へ資産の復帰を認める。それは、時間外労働を許可して、三八年五月の一連の緊急政令を起こさせる、この不安である。軍需工場の中で、生産の回復を容易にすることが、問題である。国防の諸問題に与えられた優先権は、人民戦線のある社会的経験を再疑問視するのに至らしめた。左翼諸党は、警告を繰り返す、共産党員たちを、経験を心配する。政府の内部に向かって、生産を麻痺する、四〇時間法の廃止の支持者、レイノーと、この措置、三六年の社会的征服の象徴に執着された、社会主義共和同盟の大臣たち、ラマディエとフロサールの間に、討論は、開かれる。ダラディエは、『フランスを労働に元に戻す必要がある』というその結論が、彼が、レイノーのテーゼに並んだことを指摘する、三八年八月二一日の彼の演説によって、断ち切る。ラマディエらの辞職は、この演説に続いて起こる。三八年九月―一一月は、人民戦線の決定的な解決を目撃する。

人民戦線の解決　三つの鍵＝時期は、三六年六月の多数派の解決をマークする。ミュンヘン協定、レイノー緊急政令、三八年一一月三〇日のスト。

• 三八年九月二九日のミュンヘン協定は、イギリスとフランス政府のリーダーたち、チェンバーレンとダラディエを、ムッソリーニによって支持された、ヒトラーの要求に対して、住民が、ドイツ語を話す多数派に存在する、スウェーデンのチェコ領土を併合するように譲るように見える。同盟条約によってチェコに結び付けられた、フランスは、その同盟国を放棄し、ヒトラーの暴力的手段に屈服する。大部分の世論の眼で、ダラディエは、平和を救い、それは、フランス人たちの多数派の基本的な熱望である。もしダラディエが、彼のミュンヘンの復帰で、住民によって歓呼で迎えられるならば、もし彼が、一〇月初め、議会に対して、五三五対七五票によって協定の批准を手に入れるならば、条約は、彼に反抗して、共産党の動員を引き起こす。共産党の代議士たちは、全員一致して、ミュンヘン協定に反対投票し、活動家たちは、全国の中で、首相に反対して、稀な暴力のキャンペーンを突如開始する。彼らにとって、人民戦線の創設者たちの一人は、連合の反ファシズムの局面に合わせて背いた。なお一度、共産党員たちは、政府の政策の否認を手に入れるため、連合した

諸政党を動員しようと努力する。スペアの多数派から自由にする、ダラディエは、全国人民連合委員会に、屈服することを要求しない。三八年一〇月一二日、急進党執行委員会は、委員会が、首相に反対して、共産党の攻撃が、この人民戦線の党の後退に価値が等しいように考察することは、知らせる。三〇年一〇月末、ダラディエの政策を国民投票で決定しながら、急進党マルセイユ大会は、人民戦線の死も批准し、三八年一一月一二日、急進党代表たちは、共産党員たちと差し向かいで、留まることを要求しない、社会党員たちに続いて起こった、全国人民連合委員会を離れる。

• 人民戦線の制度上の死は、三八年一一月に、ダラディエによって取られた、経済的及び社会的転換点で、真の精神的死を伴う。一一月一日、法務大臣、レイノーを、大蔵大臣、マルシャンドーに対抗させる、経済的政策について紛争を終わらせるため、ダラディエは、二人の大臣の職を置き換えるように決定する。新しい大蔵大臣、レイノーは、課税の値上げ及び四〇時間法の修正を予知する、一一月一三日、一連の緊急政令を準備する。時間外労働が、特別の規定の対象を作って、労働者たちに対して、労働の週四八時間法を要求することは、可能である。全体の左翼に続いて起こった、共産党、社会党員たち、労働総同盟の指導部、ある数の急進党員たち及び独立社会党員たちは、激しく『貧困の政令』に反対して、立ち上がる。

• 一一月三〇日のスト。首相と左翼諸勢力の間に積極的に関与した、力の試練の感情は、結局、反対者たちの議決によって、三八年一一月三〇日、政府の政策に反対して、ゼネストを突如開始するように確認されたであろう。ゼネストは、レイノー緊急政令と同様に、ミュンヘン協定を狙う、一一月三〇日の目標は、曖昧である。もしレイノー緊急政令が、反対者たちに反対して、左翼の政治的指導者たちの全員一致の賛問を得るならば、それは、多くの人が、承認した及び可決した、ミュンヘン協定で、本当ではない。もし労組の指導者たちは、彼らが、三六年六月の経験に対して歪曲として考察する、四〇時間法の修正に反対するならば、多数の労働者家族に対して、時間外労働は、かなりの資源の補足である。ジュオーは、交渉しながら、力の試練を避けるように試みた。肝心なことは、彼の政府について、左翼諸勢力が行使する、ダ

ラディエは、圧力で結着を付けることが要求するように指し示す。彼は、すべての譲歩に同意しない。ゼネストは、『マティニョンの復讐』あるいは、S＝ヴェイユの表現によれば、『経営者たちのマルヌ川の戦い』であるために、結着を付けることを切望している政府にそして経営者に直面して、到達するのに諸目的に関して、曖昧な諸条件の中で生まれた、一一月三〇日のストは、不完全な失敗によって結着する。地方と残業部門によって、続いて起こった、政府によって及び違反者たちに反対して、制裁の脅威によって決定された、交通機関の徴発によって妨害された、ミュンヘンの政策を再疑問視するように、ある労組の指導者たちあるいは活動家たちの拒否によって制限された、ゼネストは、国の麻痺に辿り着かない。ストの直後に、政府と経営者たちによって取られた措置は、左翼の社会的な不完全な失敗を、政治的な失敗に変える。公職と交通機関の中で、政府によって行われた免職、民間企業の中で、スト参加者たちの解雇は、反応なしで労組を見付ける。左翼は、戦いを失った。人民戦線は、本当に死んでいるし、政府は、行動の自由を持っている。戦争の宣言まで、フランスは、人々が、ある誇張で、『ダラディエの独裁』を呼んだ、問題の下で、生きている。

『ダラディエの独裁』　一年近くの間、三八年秋から三九年九月まで、フランスは、首相に対して、著しい権威を与える、縁のない政治的状況を生きている。三八年一一月三〇日以来、左翼は、反対の中である、活動の場について、左翼の失敗は、左翼にとって、国の中で、同じ厳しい非難の中で、社共両党員たちを混同する、強力な反マルクス主義的流れが、発展すると同様に、後退をマークする。この攻勢の前に、人民戦線の支持者たちは、黙らせるし、ダラディエに対して、行動の自由を与えることを余儀なくさせる。右翼の側から、反対の中で、社共両党員たちを拒否する、急進党たちの逆転でうっとりさせた、右翼は、首相の後ろに並ぶし、彼に反対して、闘いを繰り広げるのを拒絶して、彼に、スペアの快適な多数派を保証する。右翼の及び左翼のこの二重の麻痺は、ダラディエに対して、あらゆる入手できる政治的空間を占めるように認める。彼は、ミュンヘン協定とレイノー緊急政令以来、大きい人気で享受するだけ一層多く、彼は、大部分の世論によって、フランスで新しい紛争を避けることはできた、賢明さの人間として、しかし、フランスを、ヒトラーの攻撃

の場合に、起こり得る戦争を立ち向かう準備をさせて、全国的な立て直しの任務に連結させた、確かさの人間として褒められる。この人気で、及び彼が、享受する、著しい策略の幅で、ダラディエは、どうなるのか。最初に、彼は、彼の権力を強固にしようと、及び偉大な討論を避けながら、国を獲得する、政治的不活発さを優遇しながら、彼が、統治するため、必要となるように考える、彼を静かさを保証する、すべての人々で統合しながら、統治するため、行動の自由を保存しようと努力する。右翼を慎重に準備して、彼は、右翼で、三九年三月に、全権の可決のため、右翼の支持を手に入れる。彼に反対して、政治的ライバルを立ち上がるように見えるように避ける、及び新しい支持する闘いを突如開始するように、彼は、三九年四月に、大統領の職に対して、ルブランの再選を優遇する。最後に、社会党の仮定と『共和派的規律』で結着を付けるため、彼は、議会によって、三九年六月二七日、二つの投票で、区の多数派の投票の場所で、比例代表制への復帰を可決させる。強化された彼の権力に、彼の敵たちの及び彼の人気の弱さに支えられて、ダラディエは、ミュンヘンの直後に現れた、世論の超平和主義的な感情の漸進的な手直しを優遇しようと、及び彼が、ミュンヘン以来、避けられないと判断する、紛争の仮定に対して、心理的に、フランス人たちを準備しようと努力する。彼が、導く、フランスは、心性のレヴェルで、酷く変わっている変化を蒙った。人民戦線は、深遠な足跡を残したので、過ぎ去った諸闘争の思い出と諸闘争が、引き起こした、傷痕は、変形させる政治的偏見を横切って分析される、対外の危険の自覚に打ち勝つ。かつてない程、反ファシズムと反共主義は、正面から衝突する。人民戦線の爆発以来、反共主義が、追風を受けるのに、反ファシズムは、防衛態勢を固めている。三八年一二月に、四三二の新聞は、彼に共産党の禁止を要求するため、首相に対するアピールを発する。世論を獲得する、この辛辣な反共主義で、極右の国境を追い抜く、外国人嫌いの及び反ユダヤの流れが、付け加わる。右翼と同じく急進党員たちの及び社会党員たちの、左翼界は、結局、関係があった。この反ユダヤ主義の発展の基礎で、人々は、迫害された彼らの同じ意見の人たちに援助をもたらすため、ユダヤ人たちを、国をナチと戦争に導くように見えるように、恐れを見付ける。危機は、仕上げられるどころではない。ダラディエに盲目的な信頼、反共

主義、外国人嫌い、反ユダヤ主義は、新しい紛争の危険によって、怯えた国の、すなわち、楯を探し、現実の行動が、フランスが、酷く恐れる、試練に対して、フランスを導き得る、すべての人々を除名することを要求する、自分が弱いと感じる、国の同じ数の証明である。この三九年に、ヨーロッパの諸問題は、フランスの危機の最後の面、国際的及び軍事的政策の面を浮き彫りにしながら、国の政治的生活の流れに重きをなすであろう。正に国家の及び制度の崩壊である、この危機の結果について、三〇年代のフランスの不景気は、終了する。(七)

七　国際的及び軍事的諸政策の危機と第三共和制の崩壊

三〇年代の間、フランスが、蒙る、全体的危機は、フランスの活動が、行使される、諸領域でどれも容赦しない。フランスの国際的状況、フランスが、世界的舞台について演じることを要求する、役割、フランスの力の諸手段は、国の経済的、社会的、政治的あるいは知的生活を苦しめる、雰囲気と同じ不安定の雰囲気の犠牲者たちである。

対外的及び軍事的諸政策の矛盾と支離滅裂

三〇年代の初めでフランスの対外政策　三〇年代の初めで、フランスは、二つの軸の周りにつながる、左翼連合の時期に、エリオとブリアンによって、二四―二五年に、定義された政策とともに生きていく。国際連盟の枠内に国際的調停及び仏独協商。『ドイツを支払わらせる』ため、力を利用するように政策の意図の中で、国民ブロックによって記録された失敗に継いだ、この政策は、人口学が、停滞する、経済が、活力的でない、財政が、不確実である、及びルール地方の占領のエピソードが、政策を証明したように、フランスの諸同盟国の支持なしで行動することができない、戦争の結果によって弱められた、フランスのヴィジョンによって押し付けられる。もし同意が、国の現実の力に適合された、現実主義の政策の不可避性について存在するならば、評価は、政策の適用の様式で分かれる。隠和派と急進党員たちは、国民的諸利害の防衛の中でもっと大きな確かさを念願し、社会党員たちは、恒久的な平和の過程の創設の中で、もっとはっきりした寛

容さを念願する。ドイツと協商が、主な軸である、この調停の政策は、対話者が、ドイツ語特有の語法の膨張で、優先権を作る、もはやヴァイマール共和国でなくて、ヒトラーであることは、可能であるのか。三二年以来、フランスに、相次ぐ、左翼諸政府は、ドイツに創設された、制度のイデオロギーを考慮に入れることは、理由がなかったと考えた。三二年一二月に、エリオ内閣は、フォン＝パーペンのドイツに対して、もし別の諸国家が、軍備を撤発しなかったならば、ドイツは、再軍備することを正当になることを、暗に含まれて正当と認めて、軍備に関して、『諸権利の平等』を承認することを受け入れた。彼の側で、ダラディエ政府は、政権の座にあるヒトラーの到着の後、ナチ国家を含む、『ヨーロッパ協調』を再編成して、三三年六月七日、ドイツ、イタリア及び大英帝国で、『四国条約』を交渉する。この条約は、適用されないことは、本当である。ドイツとイタリアは、ヨーロッパの国境を再疑問視することを認めて、条約の訂正の道具を条約に検討する。フランスと大英帝国のため、人々が、国境の訂正を考える時から、あらゆる関係があった国の協定を含んで、国際連盟の枠内で、締結された地方的協商の条約が、問題である。相違は、署名された条約が、批准されないようである。対外政策に関して、フランス政府は、三三年に、二四―二五年に、定義された構想に止まっている。政権の座にあるヒトラーの到着は、彼の見解を変えなかった。

三四年の転換点及び諸同盟の政策への復帰　・新しい背景。ヒトラーの政策と三四年二月六日の諸事件は、この調停の意図を終わらせるだろう、三三年一〇月一四日、ドイツは、軍備縮小会議、次いで、一〇月一九日、国際連盟を去る。数日に、それは、問題に延期された、あらゆる『ジュネーヴの政策』である。ドイツの脅威を酷く恐れ続けた、フランスのため、危険は、明らかである。その理由は、仇敵は、同時に、国際連盟に彼の入会の時、彼が、二六年に、集まった、集団安全保障の原則を放棄した、及びローザンヌ会議に関与した軍備縮小の過程を拒否したばかりである。ヨーロッパの大きな諸強国の不安を鎮めるため、ヒトラーは、フランスに対して、有効な不可侵条約、一〇年のため、諸権利の平等の基礎について、軍備の相互の管理、最後に、ある鉱山を開発するようにフランスに対して権利を取り図らって、ドイツに、

住民投票なしで、ザール地方の返還を提案することは、本当である。二国間の交渉は、これらの基礎について掛かり合う。フランスは、ドイツが、承認できないと判断する、諸条件を提起して、交渉は、聞く耳を持たぬ者同士の対話に移行する。

• L＝バルトゥーの政策。三四年二月六日の後、先例よりもっと右翼にマークされた、内閣のグループの政権の座に到着―首相にドゥーメルグで、国務大臣としてタルディユーと外務省にバルトゥーで―は、もっと困難な諸関係を知らせる。断絶を避けるため、イギリスの努力にも拘らず、タルディユーとドゥーメルグの見解は、ドイツで自由の行動を任せるように避けた、協定の締結を受け入れるように、バルトゥーの誘惑に打ち勝つ。フランスの政府の議決は、ドイツの諸提案を拒否する、バルトゥーによって署名された、及び対外政策の新しい原理の下書きを垣間見るように任せる、文章によって締結された、三四年四月一七日のノートによって公にされる。『フランスは、今後、フランスの固有な諸手段によって、フランスの安全保障を保証するであろう。』それは、一〇年以来、フランスの対外政策の下部組織であった、及び諸同盟の再軍備と強化の伝統的政策への復帰であった、集団的安全保障の原則の放棄である。バルトゥーは、四月一七日のノートによって、定義された道の中で掛かり合う。三四年七月の合併の企ての後、交渉は、フランス、大英帝国とイタリアの間に開かれる。交渉は、三五年四月一一日、ストレーザ協定の署名に辿り着く。三つの署名者たちは、条約の一方的なすべての放棄に対抗させ、オーストリアの領土の保全に彼らの執着を確認する。三二年一一月に、エリオ政府の下に、不可侵条約の署名について不意に現れた、三一年以来、干渉された仏ソ接近を考慮に入れて、バルトゥーは、ドイツに反対して、裏の諸同盟を再編成した、及び要が、仏ソ条約になった、『東の条約』を予測する。フランスは、国際連盟へのソ連邦の入会を優遇する。バルトゥーは、描かれた道の中で、追求できない。彼は、三四年一〇月九日、彼が、マルセイユで、迎えにやって来た、ユーゴのアレクサンドル王で、クロアチアのテロリストによって暗殺される。彼の後継者、ラヴァールは、彼の政策を続ける、しかし政策を方向を変えながら。もし彼は、彼が、ローマで、三五年一月の協定を署名する、イタリアに対して調停を図ることを示すならば、もし彼は、困難なしで、ストレーザ協定に加入するならば、ラヴァールは、仏ソ条約

を締結することに控え目である。条約は、三五年五月二日、最後に略署名されるし、この国に対してフランスの及びソ連邦の援助を許す、ソーチェコ条約を付け加えられる。ラヴァールは、軍事的協約によって彼を補充するように用心するし、首相になって、彼は、議会に対してその批准を提案するのに手間を掛ける。イタリアと接近、ドイツによってザール地方の住民投票の準備の時、フランスの棄権は、バルトゥーの路線を遠去かり、彼の後継者が、第三帝国の組織的孤立の政策よりむしろファシスト諸独裁と接近の支持者であることを、指摘する。三四年四月に誇りをもって確認された政策の中で、この継続性の欠如は、演説の諸行為を分ける、隔たりを証明する。この現象は、軍事的政策に適用できる。

フランスの軍事的政策　・戦略上に関しては諸構想。フランスによって導かれた、諸同盟の政策は、フランスが、侵略の場合に、フランスの諸同盟国に対して、フランスの援助をもたらす状態にあるように想定させた。二〇年以来、フランスの軍事的政策は、厳格に防衛的である。その政策は、公権力の一致で、副議長（議長は、国家元首である）が、フランスの戦略の主な鼓吹者のように思われる、戦争最高会議によって押し付けられる。二〇年から三一年まで、この部署は、ペタン元帥によって、次いで、三一年から三五年まで、ヴェイガン将軍によって、最後にガムラン将軍によって占められる。同一の教育の、これらの三人の将軍の間に、基本的経験は、第一次大戦の経験であったため、主要なもの、すなわち、従うべき戦略の防衛的性格について、いかなる基本的差違がある。参謀部の選択は、大部分は、一四年を繰り返さないように、『フランスの血を慎重に準備する』ように意図によって、説明される。両大戦間の間、フランス人たちの努力は、コンクリートで要塞を経験された、戦争のぬかるみの及び快適でない塹壕を取って代ることに存する。それは、その考えが、二五年に生まれる、及び三〇年と三六年の間に実現される、『マジノ線』である。マジノ線は、スイスからアルデンヌまで、ドイツの国境に沿って走る。アルデンヌについては、ペタン元帥は、アルデンヌが、『戦車に乗り越せなか』った、及びもしある人たちは、移るのに成功したならば、『人々が、アルデンヌに出口に挟んだであろう』ことを、宣言しなかったのか。その向こうに、ノール県の海まで、それは、ベルギーの領土、三六年まで同盟を結んだ、次いで中立の領土である。

フランスの参謀部は、一四年に同様に、ドイツ国防軍が、ベルギーを侵略できることを、無視しない、しかし、その参謀部は、フランスの戦闘部隊が、敵を立ち向かうため、ベルギーの領土に展開したであろうことは、予知される。仮定は、防衛的な戦略に比べて二次的のままでいる。

• 軍事的な思考の動脈硬化。繰り返し、三六年に適用された、D計画は、紛争の場合に、動員と集中の作戦を覆うように、国境の近い重大なセンターを保護するように、及び編成単位に対して、防衛的戦線について状況を改善するように、欠くべからざる結集力を獲得するため、必要な時間を与えるように、次いで好都合の時間に、反撃へ移るように予知する。モーターの利用が、引き起こす、技術的進歩については、フランスの戦略家たちは、その進歩が、敏感なやり方で、一九年に紛争の終わり以来、定義された決まりを変えないように判断する。戦車の理論家、エスティエンヌ Estienne 将軍、機械化されたエリートの部隊の予言者、ドゥ＝ゴール大佐のように、幾つかの士官たちを、軍人たちの防衛的原理に適用された、対外政策を強く勧める、及び帝国の一部分の放棄を提案する、カステクス Castex 海軍大将を除けば、人々は、フランスの軍事的思考の異常な動脈硬化、フランスの危機の多様な面の一つを確認する。防衛的戦略の選択が、世論の及び世論を支えた、責任がある政治家たちの誓いに照応したことを、承認することは、正しい。それは、戦争から血を失った取り出された、人民の欲望を考慮に入れることであった。権力に対して、優先権を持つ任務は、新しい紛争を避けることであった。かかる軍事的原理は、全体の無能に対して、バルトゥーの対外政策を非難することは、明白である。その原理は、三四年四月一七日のノートの高慢な言葉が、いかなる結果で話を理解されない、事実から当然、報告する。その理由は、フランスは、一連の放棄によって、三〇年代の間、ヒトラーの膨張主義的事業に答える。

ヒトラーの暴力的手段の前で辞職　『フランスの固有な諸手段によって、フランスの安全保障を防衛する』ように、フランスによって確認された意図は、三五年から、辛い試練に置かれたであろう。三五年三月に、ドイツは、空軍を構成するように彼の意図を、次いで義務的な軍事的な兵役を回復するように彼の決定を知らせる。ヴェルサイユ条約のこの二重

の違反は、イギリス人たちとフランス人たちの側で、純粋な形式の抗議を引き起こす、しかし、その違反は、ラヴァールによって、ストレーザ協定の結論と仏ソ条約の署名を速める。三五年秋から、エチオピアに、イタリアの侵略は、イタリアとラヴァールの接近の意図を妨げる。ラヴァールが、半島を慎重に準備しようと努力するのに、彼の大臣たちの、フランスに及び大英帝国に、世論の圧力は、彼に、ドイツを孤立するのに当てられる、彼の政策を失敗に導き、国際連盟に対して、イタリアに反対して制裁の投票に参加するのを余儀なくさせる。エチオピアの事件は、ヒトラーとムッソリーニを接近した。ファシスト諸国家のブロックは、ヨーロッパに構成される。三六年一〇月に、ローマーベルリン枢軸の構成は、証明する、現象。三六年三月から、ヒトラーは、エチオピアの事件が、ヴェルサイユ条約の第二の違反を、罰せられずに、振舞うため、フランス人たちとイギリス人たちを陥れる、支障を利用する。彼は、ラインランドの再軍備化を決定する。首相サローの精力的な返事は、厳格な現実に反対して、何もできない。国政選挙を期待しながら、推移の政府、サロー内閣は、より重要な試練の中で国を掛かり合いにさせるため、必要な権威を持たない。二月以来、軍事的反撃の可能性について相談された、軍人たちは、彼らの防衛的原理の枠内で、入らない、作戦の前に逃れる。大英帝国は、大英帝国が、交戦状態の場合のように、彼の領土の一部について、ドイツのこの主権の回復を判断しないように知らさせる。自由な諸国民のこの後退は、ヒトラーに、彼の膨張の政策を続けるのに到らしめる。不干渉のフランスの提案に続けて起こった、スペインに、独伊干渉は、この分析の中で、ヒトラーを確認できる。三七年から、彼は、三八年から、独裁者を強い印象を与えない、口頭の抗議とは別の反応を引き起こさないで、実行する、征服の諸計画を立てる。三八年三月に、辞職したショータン政府を見付ける、合併も同様である。その理由は、その政府は、議会のいかなる投票が、是非必要となった、後退を延ばすため、重要な事件を判断しなかった。ミュンヘンの事件は、もっと事柄をはっきりさせる。その理由は、チェコで条約によって結び付けられた、フランスは、戦争を避けるため、彼の同盟国を放棄し、ヒトラーにスウェーデンの人たちを併合させる。何故、ヒトラーは、三九年三月に、チェコの国家で留まる、問題を奪うのに、次いでフランスの別の同盟

国、ポーランドで彼の領土的要求を呈示するのにためらったのか。ヒトラーの暴力的手段の前で、フランスの消極性は、戦争に導く、過程を始める。いずれにせよ、フランスの外交政策と軍事政策の間に、奇妙なずれについて同様に、フランスの態度の理由について、放棄のこの長い結果について自問することは、事実である。

フランスの消極性の理由　フランスの国際的政策の危機を呼ぶ必要がある、問題を説明するため、今まで、思い出された、フランスの危機の多様な面を考慮に入れる必要がある。フランスは、経済的に及び社会的に、自分の中に不安定な国を感じる。フランスは、精神的に分裂させられた国を知られる。フランスは、最後に、あらゆる犠牲を払って、一四―一八年の戦争の戦闘の悪夢への復帰を避けるように、意図を感じる。

• フランスは、経済的に不安定になる。三六―三八年のフランスの生産は、停滞しあるいは減らす。人民戦線の時期の貸付け金の導入の後、人々は、軍需工場が、紛争に対処するため、必要な機器を期待された、リズムに引き起こさないように確認する。それは、弾薬の、戦車の、及びもっと航空機の領域の中で、本当である。航空機工場は、恐慌の間に工業の投資の欠如に、インフレの結果に相次いで注文の低下に、次いで全体の再組織化を引き起こす、国有化に帰すべき、長い麻痺をよく知っていた。三六年と三八年の間に、工場に関係がある、ストは、四〇時間法の結果と同様に、この生産の停滞の中で、ストの責任を持っている。三八年の末頃に始まる、明白な立て建しは、遅くやって来るし、議会諸委員会の業績は、軍備に関して、フランスの遅れが、責任者たちに引き起こす、不安を保証する。国の経済的弱点のこの鋭い意識は、ドイツの工業的潜在力の過大評価によって強調される。

• 国の社会的不安定さは、鋭さと同様で、見分けられる。三六年六月の大ストの後、三六―三八年の時期は、生活費の値上りと三六年六月の勝利を得た大運動の思い出によって、企てられた、慢性化した労働の停止の時期である。交互に、色々な経済の部門は、一連のストによって悪影響を及ぼされる。社会の縁の強情的構造で配置する、ヒトラーに直面して、フランスは、劣等感を感じる。フランスは、同じ武器で、ドイツを立ち向かう状態にあるのか。われわれは、その信用失

墜が、三〇年代の初めから、異議を申し立てられることを、見た、自由民主主義の政治的体系の信用失墜は、全国的不安定さのこの感情を強化するのに貢献する。最も説得された民主主義者たちにあって、ドイツの全体主義的体系は、西欧諸国家の中で、自由な討論が、構成する、贅沢に直面して、恐るべき効力である、考えは、支配する。好みによってよりもっと必要によって、執行権の強化であるいは国家の改良で、フランス人たちの混乱した欲望は、説明される。フランス人たちは、自由を犠牲にしないで、国を立て直すことができる、強力な人間に憧れる。この熱望は、ダラディエが、フランスのローズヴェルトのような人を見るように願う、世論の中で、恩恵を浴する、異常な信頼の中で同様に、カグラール団の極右によって軍人の調査の中で、彼らの証明を見付ける。このパトロンの必要は、四〇年に、ペタンを考慮して出演するであろう。

• 戦争の勃発の前夜に、フランス人たちの深遠な対立だけれども、不安定さ。三〇年代の諸闘争によって残された傷痕、人民戦線の時期の潜在的な内戦の傷痕は、深遠なままである。誰でも、彼の見解を優遇した、対外政策によって敵に得をさせるように恐れて、どのように、世論が、反ファシストたちと反共主義者たちの間に分裂する時、明白な対外政策を繰り広げるのか。それは、国際に関して、政治的諸勢力の反応を案内する、諾成の国民的諸利害を防衛するような意図よりもっとファシズムの及び共産主義の恐れである。ヒトラーの危険は、右翼に過小評価される。レイノーのような人、マランのような人、アンリー＝ドゥ＝ケリリスのような人に対して、どれほどの右翼の政治家たちは、ナチに反対して闘争すること、それは、スターリンに及び共産党に得をさせることであるように考えるだろう。『ブルムよりむしろヒトラーを』という表現は、使用されなかったし、表現は、フランスの右翼の分派の感情に対応する。多くの反ファシストたちに対して、あらゆる犠牲を払って、平和の支持者たちは、ヒトラーとムッソリーニのため、好意の怪しげにあることは、本当である。その結果、国際的政策の諸事件は、諸事件が、対内政策の闘いの中で提供する、諸議論に応じてよりもっと、諸事件が、国の利害について、意味する、問題に対して、分析されない。三九年三月に、ヒトラーによってボヘミアーモラヴィ

アの併合は、その素晴らしい実例を提供する。フランスの右翼は、チェコの分割の中で、人民戦線の時期で、ストを国を弱くするままであったし、労働者たちを全国的利害を仕えるよりむしろ要求するのに引っ張った、左翼の責任を想像する。左翼は、ナチに直面して、彼の敵たちの放棄の意図の結果を、右翼にとって識別する。世論の深遠な対立は、ナチに直面して、すべての精力的な行動を麻痺させる。

• 戦争の根深い恐れ。もし経済的停滞、社会的諸闘争の追求、政治的制度の問題に戻すこと及び世論の諸対立が、フランスの消極性を説明するならば、人々は、戦争の恐れを考慮に入れないで、フランスの態度を理解できない。ミュンヘンの直後に、世論は、二つの陣営、すなわち、協定に拍手喝采した、人々、『ミュンヘン派』、そして協定に、時間にせよ、直ちに後にせよ、反対した、人々、『反ミュンヘン派』に、分裂されたように思われることは、本当である。ミュンヘン派は、平和主義者たちのように見分けられる。反ミュンヘン派は、彼らの敵たちによって、『好戦主義者たち』のように考えられる。これらの情況の名称は、いかなる現実を取り戻さない。ミュンヘン派と反ミュンヘン派は、戦争を避けるように、熱烈な欲望を持つ。彼らは、戦争に到達するような諸手段で分かれる。ミュンヘン派は、スターリンを助成した、戦争を避けるため、譲歩によって、ヒトラーを『和らげな』がら、平和を救うことを願う。この態度は、色々なニュアンスで、世論の広い部門を取り戻す。その理由は、人々は、世論に、古典的右翼の大部分と同様に極右を、しかし急進党員たちと平和に執着した、及び人々が、『好戦主義』で責める、ブルムに敵対する、フォールの規律、社会党員たちを、最後に、古い伝統に忠実な、サンディカリストたちを見付ける。『戦争よりむしろ隷属を』というスローガンは、平和主義的左翼のスローガンになるであろう。反ミュンヘン派は、彼らの敵たちが、描写する、これらの好戦主義者たちではない。彼らは、平和を守るため、どうしても戦争に導く、ヒトラーの侵害を停止する必要があるように評価する。戦争に到達するため、ナチ＝独裁者に対して、紛争をしっかりしたことを示すことが、望ましい。『ミュンヘン派』対『反ミュンヘン派』という分裂は、左翼の及び右翼の伝統的な対立を取り戻さない。人々は、『反ミュンヘン派』にあっては、共産党員たち、

ブルムの後に一部の社会党員たち、ある急進党員たち、そして同様に、レイノー等のように右翼あるいは中道ー右派のある人たち、あるいはビドー等のようにキリスト教民主主義者たちを見付ける。何も、三八ー三九年に、社会党の痙攣の外には、二つのグループの間に、これらの対峙が、帯びる、全国的分裂の性格をよりよく例証しない。三八年一二月の大会で、社会党は、フォールによって導かれた平和主義たちとブルムが、リーダーとなる、好戦主義者たちの間に、分裂させられる。ブルムは、『ポール＝フォール主義者たち』が、ブルムと彼の友人たちのある人々たちに反対して、反ユダヤ主義の武器を利用するようにためらわないで、二つの陣営は、相互に追放される、邪悪な闘争の終わりに打ち勝つ。ブルム自身の及びブルムの未来の不安定な国について、同時に、フランスの危機の成果と制度の崩壊まで、危機の掘り下げの知らせである、三九年九月に、戦争は、行う。

『奇妙な戦争』、フランスの危機の成果　三九年九月の宣戦布告　中略

『奇妙な戦争』　中略

政治的諸対立の頑強さ　中略

共産党の解散。中略

権力のための闘争。中略

フランスの軍事的崩壊及び第三共和制の死

軍事的敗北　中略

制度の崩壊　中略

結　論

この四〇年七月一〇日に、軍事的に押しつぶされた、フランスは、長い間、試練の中で勝ち取られた、世論の誇りを作った、政治的制度を目撃する。三〇年代をマークした、長い危機、経済的のみならず、精神的、社会的及び政治的危機は、全体の崩壊のように思われる、問題に行き着く。もし、短期の、人々は、将軍たちが、彼らの責任を包み隠すため、想い起こした、この機器に劣勢よりはるかにもっと、参謀部の戦略上の誤りを引き合いに出し得るならば、崩壊の説明は、他の場所で位置付けられる。感情の中で、フランス人たちは、国民的衰弱で持っている。危機を報告するために何よりな重要な、この衰弱の概念は、その起源の中で識別するのに困難である。参謀部は、それに、新しい紛争の根深い拒否を報告する、第一次大戦の間、国によって蒙った、人口学的人的損失の意識を入り込む。戦争の政府の諸形態を想い起こす、諸独裁よりもっと効力でないように考えられた、制度の有効性について不確実を、一四－一八年の紛争によって害に置かれた、人間主義の価値について疑いを、諸イデオロギーの動脈硬化を、精神的に疲労困憊させられた人民の危険の恐れを考慮に入れる必要があったであろう。どこに、三〇年代の決定的な事実である、フランスの危機の諸理由は、始めるのか、及び人々は、その起源を識別できるのか。この危機の様相を建てるのに協力する、構成要素の多様な束の中で、構成要素の間に、何らかの階統制を確立することが、人工的のように見える。確認されたように思われる、問題、それは、この危機が、戦後の世界の新しい諸条件に対して、フランスの適合の困難を表明する、及びこの不適合の中で、たとえ経済恐慌は、これらの結果を強化するとしても、第一次大戦の結果が、基本的役割を演じたことである。三〇年代は、国民的諸構造と二〇世紀の世界の発展の間に、不適合の自覚の決定的な時期を表したであろう。三〇年代は、フランスの衰弱のように見分けられる、問題の刺激の下に、当時の知的沸騰の中で、この不適応を収拾するため、提案された解決法の幾つかの

ものは、念入りで作り上げる、時期である。これらの先駆的な反省で、四〇年から八〇年代まで、公的討論を育む、及び政治的痙攣と精神的変化を横切って、新しいフランスの重要な特徴を引き出すのに導くであろう、企てのあるものは、生じる。紛争の直後に永続する、一九世紀のフランスの危機、諸事実の中で、具体化する前に、知識人たちの思弁の中に生まれる、現代のフランスの萌芽は、後天的に見られた、四〇年の悲劇へ向かって国を道程を辿らせるように思われる、三〇年代のドラマが、演じられる、背景を構成する。(八)

——九四—八—二五、完稿——

（五）Cf Ib., pp. 91-101 『人格主義』、Cf Ib., p. 96 拙著、前掲書、五〇、三九、四〇、七五頁等参照。

（六）Cf Ib., pp 103-128.『二〇年から三四年まで、フランス共産党』民主主義的中央集権主義→中央集権主義的民主主義、『共産党の加入者たち』、二一年、一一万八、二六〇人、二二年、七万八、八二八人、二三年、五万五、五九八人、二四年、七万四、二七八人、二五年、六万六、二九三人、二六年、五万六、〇〇〇人、二七年、六万四、〇〇〇人、二八年、五万六、〇〇〇人、二九年、四万五、〇〇〇人、三〇年、三万八、〇〇〇人、三一年、二万九、四一五人、三二年、三万二、〇〇〇人、三三年、四万二、〇〇〇人、『国民議会議員選挙への共産党の票』、国政選挙、登録者選挙人たち、共産党の票、百分率（登録者たちと比べて）、二四年、一、一〇七万〇、三六〇人、八七万五、八一二票、七、九％、二八年、一、一三九万五、七六〇人、一〇六万三、九四三票、九、三％、三二年、一、一六五万一、七五一人、七九万四、八八三票、六、八％、N. Racine, L Bodin, Le Parti communiste français pendant l'entre-deux-guerres, Paris, PFNSP, '82, P Robrieux, Histoire intérieure du Parti communiste, t. 1, '20-'45, Paris, Fayard, '80, J.-J Becker, Le Parti communiste français veut-il prendre le pouvoir ? Seuil, '81, J-P. Brunet, Histoire du PCF, coll《Que sais-je ?》, PUF, '82.『三二六年四月一七日、M＝トレーズのラジオで放送された選挙の演説』、『三二年及び三六年の国政選挙への得票の配分』登録者—三二年、一、一五三万三、五九三人、三六年、一、一九九万八、九五〇人、投票者たち—三二年、九五七万九、四八二人、三六年、九八四万七、二六六人、共産党員たち—三二年、七八万三、〇九八人、三六年、一四六万八、九四九人、社会党員たちと準ずる人たち—三二年、二〇三万四、一二四人、三六年、一九九万六、六六七人、急進党員たちと準ずる人たち、三二年、二三一万五、〇〇八人、三六年、一九五万五、一七四人、右翼—三二年、四三〇万七、八六五

人、三六年、四二二万三、九二八人（G＝デュプーによれば）、『三六年の議会』三六－三八年、人民戦線の多数派、急進社会党員たち、一一五名、共和社会党員たち、二六名、社会党員たち、一四六名、プロレタリア統一党、一〇名、共産党員たち、七二名、合計六〇五名中三六九名、三八－三九年、国民連合の多数派、保守主義者たち、一一名、共和民主連合、八八名、人民民主主義者たち、二三名、左翼共和主義者たち、八三名、急進及び急進独立左翼、三一名、急進社会党員たち、一一五名、共和社会党員たち、二六名、合計六〇五名中三七七名、『レオン＝ブルム（一八七二－五〇年）』、『年表、フランス人民戦線の形成とデビュー』Cf. Ib., pp. 106-107, 114, 115, 116, 119, 126. 拙著、前掲書、四九－五五、一二六－一四八、七三－七四、七〇－七一、七四－七五、六五－六九、七六－八五、八五－九一、九二－九三、二六七、九三－九四、九四－九六、二七五－二七六、九九、二七三－二七四、二六九－二七一頁等参照。

（七）Cf. pp. 129-153. J.-J. Becker et S. Berstein, *Histoire de l'anticommunisme en France*, t I, '17-'40, Paris, Olivier-Orban, '87. 、『エドゥアール＝ダラディエ（一八八四－七〇年）』、『〈フランスを労働に元に戻すこと〉』E＝ダラディエ、三八年八月二一日のラジオ放送された演説、『潜在的な反ユダヤ主義』急進党の『新時代』紙、『年表、人民戦線の失敗及び第三共和制の苦悩』Cf. Ib., pp. 131, 140, 150, 151, 153. 拙著、前掲書、九九－一〇一、一〇二、二七二－二七三、一〇三、一二三－一二五頁等参照。

（八）Cf. Ib., pp. 155-171.『諸対立の頑強さ』、『ニェーヴル川の反響』という急進党新聞、『四〇年五月－六月、フランスのキャンペーン』Cf. Ib., pp. 161, 168 拙著、前掲書、二一三－二一六、二九九－三〇〇頁等参照。

付　記

（一）主要参考文献は、CHIRM, N°49, Deux cents ans de Républiques, '92, C. L. R. James, World Revolution 1917-1936. The Rise of the Communist International. (Revolutionary Studies), Humanities, US, '93, A. Grelon, Les ingénieurs de la crise, titre et profession entre les deux guerres, Paris, '84, CHIRM, N°50, Le Komintern et le PCF (1939-1941), '93, E Du Reau, Edouard Daladier: 1884-1970, Fayard, '93, etc. である。

（二）筆者は、今年、CRHMSS, Université de Paris I. Bulletin N°17, '94 をまだ寄贈されていない。外国で八六六種、国内で一、一八四種、合計二、〇五〇種である。（九四－八－二五、現在。）